

---

# パンドラ魔法学校と黄昏の賢者達

東奔西走

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パンドラ魔法学校と黄昏の賢者達

### 【Nコード】

N3590Q

### 【作者名】

東奔西走

### 【あらすじ】

え？魔法学校に強制入学？魔法使い？いいね、いつか私も箒にまたがって空を飛んでみたいわ　ってアホかーっ！！

いつも見る夢……

開いてしまった魔法界への門……

面倒くさがりだが数字には超強い少女が迷い込んだのは、アラ不思議！なんと魔法界だった！！

話等によって語り手がコロコロ変わっています。  
ご了承ください。

## 第一話：夢の中の門（前書き）

どうもこんにちは！

初連載です

色々とおかしな所が有ると思いますが、一生懸命書いていきたいと思  
います！

宜しくお願いします！

それでは、少しでも読者様が楽しめますように……

## 第一話：夢の中の門

まただ。

またこの夢…

とても悲しくて胸を締め付けるこのシーン……

どうして私はこの夢ばかりみるのだろうか？

何か……何か私に関係してるの？

\*\*\*

しんしんと降り続ける雨。

一面が緑色の草の絨毯は今、下を向きながら、落ちてくる雫を地面へと促している。

まるで泣いている様だ。

門、あの場所へ繋がるこの扉。

遠い記憶が、歯止めを知らぬ清流の様に頭の中に流れ込む。

眼を閉じると、まるで今起きているかの様に、目蓋の裏に鮮明に映

し出されるあの情景。

「ジャック、この世界に……革命を起こしてみないか？」

そう笑ったあいつはもういない。

……こんな事になるんだったら、……自分の中での後悔が止まら  
ない。

頬を伝う雫は雨か涙か、はたまた血かも解らない。もうぐちゃぐち  
やだ。

漆黒の髪もローブも手も足も、心も皆ボロボロで、こんな俺をあ  
いづが見たら、「しっかりしろ！」と怒るだろうな……。

辛い、辛い……

この門から出ていきたい！  
全てを忘れて何もかも解放されたい！

バンツと拳で扉を叩く。

だが雨で滑り、身体が崩れる様に地面に座り込む。

前に立ちふさがる壁に、動かぬ門に、自分の無力さが改めて胸を打  
つ。……これで二度目。

一度目は……そう、

家族同然の親友…… ロビンを目の前で殺された時……

大切な人を失う怖さとその後に残る喪失感、人の命の儚さを前に、俺は何もする事が出来ない。

たった19歳の俺は無力だ。

「……うつ……うあああっ……!!!!」  
抑えきれない嗚咽を俺は長い間吐き出していた。

\*\*\*

また同じ夢だ。

最近同じ様な夢を見る様になった。

シーンはいつも広い草原に一つの、前も後ろも無い門、天候はいつも雨。

空は重苦しい灰色の雨雲。

その草原に一人の男の人が立っている。酷く悲しいシーンなのだ。

布団から出て顔を洗う。

鏡に移る自分の顔はいつもとなんら変わらない。

私の名前は結城淋漓<sup>ゆつきりんり</sup>。凄く変わった名前。

特に美人な訳じゃないし、これと違って得意な事が有るわけでもない。強いて言えば剣道（中学の時やった）、ヴァイオリン（あまりの下手さにやめた）、数検一級（中学一年の時とった）。

……私数学得意じゃん。さすが私。

何故か私の脳内構図は数学がお得意のようで、いつの間にか、というか勉強しなくとも数学は出来た。その代わり、英語は壊滅的。三人称単数形ってなんだ。

まあつまり、名前が珍しい＝凄いでなく、特に何も無い女の子なのでした。

7

今日は春休み最後の日。

明日から私も高校生だ。

幼い頃に亡くなった両親の代わりに今まで育ててくれた伯父さんと伯母さんの進めで、代々結城家が継いできたお化け屋敷の様な洋館に住むことにした。

内装はともかく（クモの巣が赤外線センサーみたくなってた）、洋館の外見は凄く立派だし、周りは自然豊かで、景色は最高だ。

ベランダに出て感傷に浸る。

一面の草原に風に揺れる木々、空気はいつも新鮮で息を吸うと肺に

春の冷たい空気が入る。

この洋館には先祖達が住んでいた。代々このオバケの一匹や二匹出  
そうな所で、……人里離れた所で…何を思っていたんだろう……。

感傷終わり。

「さ、朝ご飯食べたら散歩に行こう。」

\*\*\*

空は快晴で気温も穏やか、散歩するには持って来いだ。

緑色の絨毯の上を風と一緒に前進する。

幾つもの丘陵きゅうりゅうを超える。すると、ゆるいカーブになる下り坂に繋が  
った。

「あ、あれ？あの扉………」

広い草原の中に『ポツン』と言うより『デンツ』とそびえ立つ門。  
前も後ろも無く、通り抜けるだけの様な門。

近づいてよく見る。

レンガで作られている枠に結構丈夫そうな木の扉。  
それは裏から見ても表から見ても変わらなかった。

間違えない。

「夢に出てくる扉と同じ……」

ぶわりと空気が舞い上がる。

一面の草原が風で騒ぎ始める。

私の頭が警告音を発し、脳から行くなと指令が出る。

だが足は吸い寄せられる様に門へと近づいてしまう。

風が背中を押す。

この門の奥には何が有るのだろうか？

私の夢と何か関係あるの？

ただ通り抜けるしかなさそうなの門は、一体何？

ガチャリ、という音にはっ、とすれば、もう門に手を掛けていた。

門は開いた。

## 第二話：迷い込んだ世界

「えっ？……「どこどこ？！」」

突然目が覚めた様な感覚におそわれ、辺りを見渡すと色々な店が両端に所狭しと並んだ街道があった。

建物等の雰囲気からして日本ではない。

………まさか。

「「これはまさか………。」」

身体がツンドラ気候になってきたその時

ダンっ！！

背中に衝撃があり、前につんのめった。

「？！」

「「おっと！お嬢ちゃん、ぼーっとっ立ってたら危ないよ。」」

「すみません。………！」

振り向くとそこには双子の男の人達が、脇に荷物を抱えながら立っていた。

だが、んなことどうでもよかった。

「扉は!？」

扉が無くなっていった。私が通って来たあの扉。びっくりして扉のあった場所に駆け寄る。

「扉?」「扉つて?」「さあ?」

テンポのいい双子の会話が虚しく響く。

ヤバイ。

ヤバイぞこれは。

帰れなくなつた。

「どうか勘違い(・・・)で有りますように。」

双子を振り替える。金髪に緑色の瞳、人の良さそうな顔が二つずつ。全く見分けがつかない。

「あの聞きたい事が有るんですけど。」

「どうした?」

「ここはどこですか?」

\*\*\*

綺麗な金掛かつた銀髪が歩く度にふわふわ揺れる。

肌は真っ白で青い瞳、お人形のような顔。

少し変わった雰囲気纏った彼女は、ニコニコしながら学校前街道キャンディークロスを歩く。

レモンレモン と看板がかかる店に入る。カランカランと音がなる。

「こんにちは。占星術魔本下さい。」

「あらジャンナ！久しぶりね！」「お久しぶりベティおばさん」

少しぼつちやりしたこの占星術専門店のオーナー、ベティは本棚から二冊取り出した。

「明日から新入生ね！おめでとうジャンナ、この魔本はあげるわ！入学祝いにつ！」

「いいの？！ありがとうベティおばさん、私あの、世界一の魔法学校で頑張るわ！」

ふんわり笑うジャンナ。

「パンドラ魔法学校で魔法を学ぶのが、私の夢だったんだもの！」

\*\*\*

辺り一面がお菓子おかしオカシ。今私はこの双子に連れられ、お菓子専門店 レインボーカクテル に居た。

「何ていうかまあコレは何ともいえないけどアレでソレな。」

「大丈夫！」「心配しなくても俺達はー！」「常にひとつ！

！」

「やかましいわ！」

その時私に棒が着いたペロペロキャンディを投げて来た。  
赤と透明の水飴で出来たキャンディ。

「食べなよ!」「それはきつとトマト味さ!」「いや違うねあれは  
パプリカ味だ!」

こいつらはまともな会話が出来ないのだろうか。

「でも私お金持ってないの。」

「聞いたかいルナ!」「ああルカ!キャンディ代位」「淋漓!俺  
達に任せろー!」「」

カラーマシユマロを頬張った二人の名前はそれぞれルカ、ルナ・マ  
ツカーシーと言つらしい。

双子曰く。

ここは魔法の世界。名前はミストダイヤ。

この通りは、キャンディクロス学校前街道と言い、この道を真つ直ぐ進むと、世界五  
大魔法学校の一つ『パンドラ魔法学校』が有るらしい。

この学校、明日から新学期らしく、この通りにある店で魔法具や教  
材を揃えるらしい。

すっげーなー。

……………どうなる私。

そんな所に『魔法使えない』『一文無し』で放り込まれた(自分か  
ら入った)私は他人事だと思つていた。

にゃー

猫の鳴き声が聞こえたので足元に目をやると、可愛いすぎる黒猫がいた。

ルカルナが、ハットクツキーをお互いの口に入れながら囁く。

「ニツクだ。」「黒猫ニツク!」「気を付ける!爆発するぞ!」「

ポオン!!!

時既に遅し。

黒猫から薄ピンク色の煙がもくもくと出る。

げっほんげっほん咳き込む中薄目を開けると、煙の中から表れたのは、人間だった。

なんたるこつちゃ!

「なるほどコレが魔法の力か。」

目の前に表れたのは、艶々の黒髪に透き通った黄金色の瞳、陶器の様な白い肌。……………整いすぎている。

スラリと高い身長に纏うのは真っ黒なローブ、胸元にエンブレムが着いている。

周りの煙が消えた頃、その男の人が口を開いた。

「結城淋漓で合ってる?」

何故知ってる。

「は、はい。そうです。」

スツと細められた目が私を見透かしているよう。

「僕の名前はニック。君を呼びにきました。」  
「え？」

何だか口調が面倒くさそうだ。そして話の内容も面倒くさそうだ。ニックの両端からルカとルナが顔をひよこつと出す。

「ニックは見た目はホラーだけど！」「実際はあつたまいいし！」  
「実は優しかったり慈悲深かったりしちゃうー！」

ギロツとニックは二人を睨む。

「うるさいぞ。黙れ。」

この二人が言うなら怪しくは無いらしいけど、何故私を呼びに来たのだ？

「行くぞ、着いてこい。」

有無を言わせぬ口調と視線に私は、厄介だと思っても着いていくしかない。

「心配するな淋漓！」「あいつに着いて行けば危険は無い！」  
「行ってこーい！！！」

「二人共、キャンディをありがとう、それと他にも……」

「いいって事よ！」「またな淋漓！」  
「「そんじゃねー！！！」

二人に背中を押され、ニックの待つ店の外へ繋がるドアに手をかけた。



### 第三話：魔法使いとお買物

明日からそのうんちゃら魔法学校の新学期で、教材等を買いに來ている人達がキャンディクロスを忙しく歩いていく。その人達に交じり私はニツクの後ろを歩く。

.....  
「.....あの?」  
「なんだ?」  
「さつき黒猫から人間になりませんでした?」  
「ああ、変身魔法の一種だ。」  
へえすつげえんだなーまほつって。

「お前も直習きじつさ。」  
「そうかいそうかい。」  
「つて今この猫なんつった?」

訳も解らず着いていくとニツクは左折し、ある店の前で止まる。

看板には 簿けい専門店カンカン とある。

「お前の金はここにある。」  
「え?まさか、私お金何か持ってきてないもの。」

ニックがローブの懐からコインがぎっしり入った麻袋を取り出したので、ぎよっとした私は否定をするが、ニックは完全無視。構わず店に入っていた。

「ようニック、珍しいな。筭がグレた（壊れた）か？」

「いや、この店で一番性能のいい筭を一本。」

「おうよ！この店にある筭は皆世界一だけどよ、強いて言うならこのアレクサンダーAAだ！」

気の良さそうな店主が感じの悪そうなニックに向かって筭を取り出す。

残念ながら私は筭に対して、良し悪しの概念が無いため一本の筭を見ても何も感想が上らない。

だがニックは話を進める。

「いくらだ？」

「3000キヤッツ」

「ん」

この世界の金の単位は猫なのか。さっきから猫だらけだ。

チャリンとニックはさっきの麻袋からコインを出した。

こいつさっき、それは私の金だって言っただけか？  
人の金で何してんだ！

「ん？おや？見かけねえ嬢ちゃんだな。ニツクのガールフレンドか？ちとニツクには勿体ねえな。お前見たいな仏頂面には……………」

「行くぞ。」

ニツクは箒を手に取るとさっさと店を出ていく。

それから次から次へと色々な店に入り教材やら、魔法瓶やらをゴツソリ買った。

どうして止めなかったかって？

だって私の話を聞かないんだもん。

さっき双子から買ったペロペロキャンディと、元からポツケに入っていた板チョコを出す。

「飴とチョコ、どっちが食べたいですか？」

「クッキー。」

ほらね。

\*\*\*

ニツクの魔法で重量の減った荷物を持ち、大分歩いた頃私は口を開く。

「あの、この荷物は何ですか？」「明日からお前が使う魔法具だ。」

「はいー？」

素っ頓狂な声を上げた私を振り返り、ニツクはニヤリと不敵に笑った。

初めて見る表情だ。

「ようこそ、我がパンドラ魔法学校へ。」

いつの間にかニツクの後ろには大きな西洋風の建物がそびえ立っていた。

明日からお前はこの学校の生徒だ。

にやんだと。

### 第三話：魔法使いとお買物（後書き）

おはようございます

ここまで読んで下さってありがとうございます！

これから魔法界の設定や、学校の設定、キャラ設定も後更新する予定です。

よろしく願います

#### 第四話：校長お悩み相談教室

大きな古城を思わせる外見、イギリスにあるウェストミンスター宮殿の様な建物。

それこそ魔法の筈かなんかで移動しないと大変そうな広大な敷地。

これ学校？！

「詳しい事は校長に聞け。連れて行ってやるから。」

パチンとニツクが指を鳴らした。すると今まで私達がひっさげていた荷物が消えた。

「あれ？荷物は？私どっかに落とした？」

とか言いながら後ろを振り替えるが何も無い。あれ？

「魔法だ。お前の荷物はここにある。」

差し出されたニツクの手には、透明のテニスボール程のガラス玉が乗っていた。

「ここは全寮制の学校。自分の部屋に着いたら、地面で叩き割るんだ。」

魔法で出来ているから、ガラスの破片も無いし、荷物も元通りだ。」

凄いな魔法。

外見でも驚いたけど、内装ではもはや口を開けるしかなかった。

天井高いわ、銅像が喋ってるわ、絵画が動いてるわ、廊下を食料の乗った食器が行き来してるわ、さすがに階段は動かなかったが、かなりの高くオリティだ。

校長室に入るとこれやまたたまげた。

天井が満天の星なのだ。

と言うか、天井が無く真上の星空がそのまま部屋の一部になっている。

「校長連れて来ましたよ。」

ニックが誰も居ない室内で呟くと暗かった室内が急に明るくなり、目をしばしばさせていたら風景が変わっていた。

「……………なにここ縄文時代？」

はにわ転がってるし……………。

げっそり呟いた私の言葉に何の返答もなかった。

「ようようニック、ご苦労じゃったな。」

そう言いながら部屋の奥から出てきたのは、サンタクロースみたいなヒゲモシヤおじさんだった。

ヒゲモシヤおじさんは私を見てニッコリと笑った。

「それじゃ僕はこれで。」

そうヒゲモシヤおじさんに軽く礼をしニックは出て行ってしまった。すれ違い際に目があったが、射ぬくような金色の瞳からは何も読み解く事が出来なかった。

パタンと扉の閉まる音が合図の様に、椅子が私の所へ歩いて来る。

「まあすわるんじゃ。」

パチンと指の鳴る音と共に、ティーカップに紅茶が注がれ私の所へ飛んできて、カップが僅かに笑った。

どうやら、この世界をでは、物が生きているらしい。

「さて、この風景はちと………イマイチじゃの。」

いただきます、と紅茶を啜った私に微笑み、手を一振りした。

すると、今まで土器や石器等が転がっていた縄文時代の様な風景から、さっきの星空の風景になった。

一面の壁が銀河系になった。

部屋に飾ってある金色の模型や、置物もより一層綺麗に見える。

そして私とヒゲモシヤおじさんが囲んでいる小さな丸テーブルが、その暗い部屋の中でほんわかと暖かい光で包まれていた。

「まずは自己紹介からじゃの。」

ふがふがと口をモゴモゴさせながら喋る校長は、まるで縮こまったネズミの様だ。

「わしの名前はランスロット・カルヴァートじゃ。このパンドラ魔

法学校の校長を務めて今年で七年目じゃ。お前さんは確か………」  
「結城淋漓と言います。何か突然こんな所に来ちゃって、私にもよく解らなくて、したら何か飴をくれた双子さんとか、さっきの黒髪の子ツクさんとかが………」

まくしたてる私の言葉を遮るように校長が手を上げながら喋り出した。

「そうじゃ！そうじゃ！あのアレクサンダーの！」

「アレクサンダー？………何ですかそれ？」

「い、いやこつちの話じゃ。気にせんでよかるう。」

歯切れ悪く答えた校長は、二杯目の紅茶をドボドボと注ぐ。

正式には魔法でだが。

「よかるう。淋漓、君は明日からこの学校の生徒になるのじゃ。」

「ん？今なんて？」

「軽く説明するとじゃな、我が校は読んで字の如く魔法学校じゃ。」

「聞いてます？私の話。」

「世の中から魔法の素質が有る者が入れるのじゃ。」

「無視っばいですね。待って下さい。」

「一から魔法を学び、魔法使いとして立派に生きて行ける様にじゃ  
の」

「ちよつと待ってください！！」

「なんじゃね？」

人をここまで無視しておいて、キョトンという顔をしている。  
変わった人だ。

「私はこの世界の事全く知りません。それに魔法だって使えないし、

そもそも何故この世界に……」「まつのじゃ淋漓。」

私の抗議を手で制する校長は、さっきのまくしたてる雰囲気と打って変わって、冷静さと温厚さを放っていた。

「いいかの？」

校長の瞳が光る。

「全ては『必然』じゃ。」

部屋に静寂が満ちる。

天井では星達が二人の会話を見守っている。

「淋漓、お前さんがこの魔法界に来たのも、このパンドラ魔法学校に入学するのも、全て前から決められていたのじゃ。」

それじゃまるで私は世界に操られているみたいだ。

「だが勘違いしてはならんぞ。……それは何のせいでも無いんじゃ。運命は誰にも解らぬ。」

そこまで言つと校長は天井を指さす。

「只一つ、星を除いてはな。」

校長につられて星を見る。

確かに星はすべてを知っていきそうだ。

掴めそうで掴めない。一見遠すぎる存在、それは、いつもすぐ傍で私達を見守ってくれているのかもしれない。

「校長先生、一つ不思議な事があるんです。」  
「なんじゃね？」

そう答えながら校長はテーブルの上にチョコレートを出した。  
色とりどりの包み紙に包まれている。

私はそれを口に含み話を続ける。

「さつき教材とか簿を買った時のお金、あれ私のお金って聞いた  
んですけど、何故この魔法界に私のお金が？」  
「それは、お前さんの祖先が残したお金じゃ。遠慮なく使うのじ  
ゃ。」

祖先？

私の祖先にもこの世界に来た人が居るって事？  
まさか私の一家は全員魔法使い！？  
恐ろしい事だ……

校長は手をパンパンと叩く。  
その音で現実に戻された。

「茶会はおわりじゃ。今日はゆっくり休むのじゃ。明日が入学式じ  
ゃからの。」

「あの、色々ありがとうございます。」  
「明日から頑張るのじゃぞ。」

色々有りすぎて正直どうしたらいいか解らない。  
小さい頃から面倒事が嫌いだった。  
だが今、そんな事言っている場合では無い。

とにかく前に進むしかない。

部屋を出る際、校長が言った。

「昨日から学び、今日を生き、明日へ期待しよう。」

そう言いニツク笑い笑ってその場から、スーッと消えるように居なくなってしまうた。

「消えた……………」

「タヌキもアインシュタインの名言が好きだな。」

「わあっ！！」

突然真後ろから声が聞こえた。

振り向くとそこには黒猫ニツクさんが立っていた。

「アインシュタイン？……………って誰だっけ？」

「さあ、行くぞ。校内の知識を頭にたたき込むんだ。」

私の質問はシカトという名の処理を受けた。

と、思ったらニツクが直ぐに振り返った。

「改めまして、俺はニツク・カルヴァート。宜しく。」

笑った……………！！

ニツクは前を向き赤い絨毯を踏みしめた。

これから何が起こるか解らない。けどまあ魔法界の生活なんて滅多に出来る事じゃない。

何歩譲ればいいのか見当もつかないが、ラッキーだと思っことにしよう。

私は前を颯爽と歩くニツクを追って走った。

#### 第四話・校長お悩み相談教室（後書き）

こんにちは！

ここまで読んで下さり、感謝しています！

校長が最後に発した言葉は、アインシュタインの名言です。

さあ、これから主人公はどうなるでしょうか！？

これからもよろしく願います

## 第五話：魔法使いは案内人？

淋漓とニツクは広い庭園を横切る。

「この学校のクラスは全部で四つ。

正直で勇猛果敢な生徒が集うアレクサンダークラス。

上品で華麗な女子だけを集めたキャロウクラス。

努力家な博学多才が集うベルナツプクラス。

強い意志があり騎士道精神が溢れた者が集うエッジワースクラス。

それぞれのクラスの寮の前に立っている銅像は、クラスの創設者達だ。」

流暢に説明されながら見て回った所は、四つのクラスの寮だった。

広い校舎を東西南北分けるように、寮は立っていた。

螺旋階段状に部屋が男女別になって配置されている。

「クラス分けは明日。講堂で行われる。

この講堂は食堂としても利用される。

その講堂が……ここだ。」

大きく開かれていた扉から中を覗くと、私は目を見開いた。

「広い……。」

横の幅は勿論、縦も凄く高い。

何台も置かれたテーブルの上には何本もの暖かい光を放つ蠟燭が立

っている。

「あ、でもクラス分けってどうやってするんですか？」

お前はもう手遅れです。

バカだからクラス分け出来ません、何て事にならないだろうか？

なりかねない。

「クラス分けにバカかどうかは関係ない。」

そうかそれはよかった。

……… って勝手に心読むな！！

ニツクはひらりと黒いローブを翻しながら歩く。

足の短い私は小走りで追いかける。

「クラスにはそれぞれカラーがある。

そのカラーでクラス分けする。」

先ず、カエルの舌とヌマジ草を減エタノールで煎じた壺の中に、無色透明のペンダントを入れる。自分の手でだ。」

そのカエルとかナンチャラ草とか聞いた事ない薬品が出てくる時点でもう色々手遅れかもしれない。

「次に魔法瓶に入った真水を壺の中に流す。

そうすると、………

ちよつと待て。

「ここら一帯が占星術、薬草術、魔法理論とかの教室になる。」

寮に東西南北を守られる様に立つ本館の三、五階迄に、沢山の教室が詰め込まれていた。

途中、階段の踊り場では地面から白いオバケが飛びだしてき、

途中、廊下の壁に飾ってある肖像画（なぜか安倍晴明）からギャグ一発吹き込まれ、

途中、喋るお皿とフォークとスプーンに喧嘩を売られ、

途中、なぜか喋るフクロウからピタゴラスの話を延々と聞かされ、

と、とんだ災難だった。

もしかして私は今年、厄年なのかも知れない。

「さつき君が行った校長室はここ本館の六階。最上階だ。」

本館にはエレベーターが有るが、魔法で出来ているからな。ちよつとした事故が起こる。」

「ちよつとした事故って何ですか？」

「閉じ込められるかいきなり落ちる。」

ちよつとどころの話では済まないじゃないか。

「それ凄く危ないですか？」

ニツクを見上げると、歩きながら中々ニヒルな顔をしていらつしやる。

「経験者が言うんだ。間違えない。」

「え？」

問題のエレベーター前に立ち止まる。  
おとぎ話によく出て来るような可愛いエレベーターだ。

「校長室に行くときに何回も死にかけた。……あのタヌキめ。  
あいつが裏で操ってたんだ。」

そっいつって自重気味に微笑むニック。

……………不気味だ。

「あの、ニックさんって校長と仲良いんですね。」

私は可笑しくてへらり笑いながら言うと、ニックはキョトンとした顔になった。

「そんな風に見えるのか？」

「はい。何か親子みたいな。」

歳離れすぎだろ。

と自分でつつこんでしまった。

「まあ、俺はあのタヌキの孫だしな。」

……………。

「……………。今なんて？」

ニックが階段を降りながら、何を今更、な顔をしながら言った。

「俺は校長の実の孫だ。」

「えーっ！？」

「気がつかなかったのか？」

淋漓は頭上に漫画の吹き出しを出す。

モクモク形の吹き出しの中に校長を写し、目の前のニックと比べる。

「似てない……………」

三角帽子被ってふおっふおっふお笑ってる校長。

凄く整端な顔をしているけど突き刺すような金色の瞳のニック。

「最高の誉め言葉さ。」

ニヤリと笑った顔に不覚にもドキッとしてしまった。

「さて、一通り説明したし、そろそろ時間だ。俺はこれで失礼する。」

気付けばもうとくに日は暮れ、学校が綺麗にライトアップされている。

本館を出て、庭園を横切る通路を歩いていたら、道が左右に別れていた。

じゃあ、と言いきだそうとするニックの黒いローブを私は無意識の内に掴んでいた。

怪訝な顔をしてニックは私を見た。

金色の瞳が本当に綺麗だ。

「あ、あの、えーっと、今日はありがとうございました。  
ニツクさんのおかげで学校の事知れて。」

正直私は数学しか取り柄が無い。

「知れたのはいいんですけど、私、大丈夫ですかね？」

自分自身の事を他人に聞くのはちょっと不思議。

他人からしてみれば、知ったことが、って感じだろうけど……。

けれどニツクは、

「大丈夫。何かあれば聞きに来い。

俺じゃなくてもさつき会った双子でもいい。

あいつらはああ見えて中々デキる魔法使いだ。大いに利用するとい  
い。」

そう笑って歩いて行ってしまった。

黒いローブをひらひらさせて歩く背中を見送っていると、ニツクは  
振り返り口を開く。

「名前に『さん』なんかつけるな。呼び捨てで構わない。」

この五年制(らしい)の学校で、何年生なのかも何処のクラスなの  
かも解らない(ただ聞くの忘れた)ニツクの言葉に、何故こうも安  
心させられるのか。

「あ！結局クラス分けはどうやるのよ！」

ニツクの姿が消えた通路の真ん中で、一人で騒いでる淋漓の横を、  
箒の集団が横切った。

……………箒が歩いてる。

私はどつと疲れが出てきた。

そんな淋漓の姿を遠くから見ていたニツクは、自然と頬が緩んだ。  
それを見た友人は一言。

「ニヤニヤするな変態。」

途端にニツクの雷が落ちた。

## 第五話：魔法使いは案内人？（後書き）

その内、キャラクター説明や学校内の説明などを、更新していくつもりです。

## 第六話：インチキ魔法学校入学式

さあやって参りました入学式。

昨日ニツクに案内してもらった講堂に、大勢の自称：ゴホンっ……立派な魔法使いのタマゴ達が、制服に身を包み集まっています。

因みにここの制服は、白いブラウスに女子はクラス色のリボン（クラスが決まりしだい配布される）、男子はネクタイに、男女共に黒いスカートとズボン。裾には白いラインが着いている。

ネクタイとリボンは銀バンドラカラーと赤・青・オレンジ・緑クラスカラーのシマシマになっている。

仕上げに学校のエンブレムが刺繍してあるロープ。と、至って普通の物になっている。

前方の台の上では校長が、三角帽子を被って演説をしている。何かナイトキャップにも見える。

校長らしく胸を張り、今年からエセ占い、いや魔法を習う新入生達に初心の心を教え込んだ。

「それでは諸君、クラス分けに移ろうかの。」

校長の発した言葉に対して、辺りが騒ついた。

前を見ると、既に大きな壺が用意されていた。中から何やら怪しげな煙が出ている。

「いいかの？ 新入生君達は選ばれたクラスのテーブルに移動するのじゃ。このペンダントを持つての。」

校長がチャリンと音をたてながら掲げたのは、綺麗な透明のダイヤだった。

飴玉位の大きさだろうか。

結構大きい。

首から下げられる様になっている様で、ダイヤから銀色の鎖が着いている。

「それじゃ順番に来るのじゃぞ！」

それを合図に、最前列に座っていた新入生達が壺の前に並びだす。

私は周りの人達に押されるようにしながら並んだ。すると後ろの子が急に私と腕を組んできた。

「？」

「貴方名前何ていうの？」

振り向くとそこには綺麗で可愛い女の子が私を見ていた。

「私の名前はね、ジャンナ・ヴァレンニコフ。同じクラスになれると嬉しいわ！」

ふわふわの柔らかそうな髪と、人形のような顔立ち、真っ青な瞳。

私も女だけど、同じ女とは思えない。悲しいけど……。

「私、結城淋瀝。よろしくね。」「ええ、よろしく！」

ふふ、と笑った顔が可愛い。

ジャンナと何気ない会話をしていたら、いつの間にか私の番になっていた。

それまで組まれていたジャンナの腕が離れた。

壇上になると校長と目が合った。柔らかく笑っている。

目を閉じると、周りの音が遙か遠くの音の様に拡散していく。

目を開くと、目の前の光景が確かな現実として脳内に反映される。

後ろを向くと様々なクラスの在校生が、期待の目で壺と私を見ている。

最後にジャンナを見ると、ニッコリ笑って私を見上げていた。

私もニッコリ笑って前に向き直った。

校長とまた目が合い今度は真っ直ぐ私を見ていた。

私はしっかりと首を縦に降る。

もうとっくに決心している。

今日からここが、私の居場所だ。

僅かな光が私の中に宿る。

私の目を見ていた校長は、満面の笑みを浮かべた。

目の前に置かれた真水の入った魔法瓶を片手に、もう一方の手で透明のペンダントを壺の中に落とした。

壺の中を覗くが何も変化は無い。次に魔法瓶の中身を一気に壺へ流す。

緊張しているのか、無意識に空になった魔法瓶を持つ手に力が入る。

そんな私の緊張を解こうとしてくれるのか、なめているのか解らないが、いきなり壺の中から出て来た煙がオバケの形を作り出し、しかも笑った。

「ひっひっひっ」

これはなめられてる。

「何よ！」

校長がパァンっと手を叩く。

するとオバケ型煙は消え、壺の中から、さっき私が入れたペンダントが飛び出す。

あれ？赤い……………？

透明だったはずのペンダントが真っ赤なルビーのようになっていた。

「結城淋漓アレクサンダークラス！」

校長の声とペンダントの色を見た生徒達が歓声を上げる。

「淋漓、これはアレクサンダークラスの証じゃ、  
しっかり首にかけておくのじゃぞ。」

さ、行きなさい。

次の子前に来るのじゃ。」

冷たい金属が首に触れたと思ったら、既に校長に背中を押されていた。

「やあ！入学おめでとう！」

「アレクサンダークラスにようこそ！」

「解らない事あったら何でも聞いてよね。」

テーブルに着くと同じ赤いペンダントをした、アレクサンダークラスの人達に歓迎された。

そんな時、後ろから聞き慣れた声が出た。

「「淋漓！入学おめでとう！アレクサンダークラスおめでとう！」」

「ルカ、ルナ……」

陽気無邪気な天気な声が聞こえ振り替えると、ニンマリ笑った双子ルカとルナが立っていた。

お互いの肩を組んで、空いている手でシャンパンのビンを持っていく。

その姿さえシメントリーだ。

見事に左右対称である。

「このクラスだったんだ。」

「そうさ!」「俺たちアレクサンダークラスのー?」「第三学年の問題児!」「今年も盛り上がりすぎて行こう!」

自分の口でパフパフパー 等とホザいている。

私は驚いた。

コレが二つも歳上だったなんて。

「精神年齢は私と同じ位なのに。」

ボソツと呟いた私に双子は首をグリンと回し（不気味だ）、満面の笑顔をこちらに向けた。

「何か言った?」

「何も言ってますん!」

開けてないシャンパンを私に手渡す双子に、そういえばと聞く。

「ニツクって何年ですか?」

「黒猫は三年。」「俺達と一緒にさ!」

そうか、三年だったのか。

「淋漓!やったわ、同じクラスよ!」

「おわっ!」

ジャンナが私に飛び付いてきた。重力に逆らえず後ろから倒れる寸前に、誰かの手が私の肩を受けとめる。

「……………！！あつ、ニツク！」

振り替えるとそこにいたのはニツクだった。  
胸には真つ赤なダイヤが輝いている。

「あ、兄さん！」

私の後ろからひょっこり顔を出してジャンナはニツクの方を見た。

「は？」 「え？」 「」

双子と私はハモる。

この二人が兄弟！？

そんなばなな！

## 第七話：フォークとシスコンが騒ぐ

双子が私を軽蔑の目で見る。

「ちょっと淋漓、それスツゴク寒いから。」「今時そんなばななつて。」

失礼な。

かの大陰陽師安倍晴明が廊下で私に言ったお言葉だぞ！

「だじゃれの話終わり。次行こう次。」

私はジャンナの顔とニツクの顔を交互に十回位見比べる。

「ジャンナのお兄さん？ニツクが？」

「似てないなー。」

双子は本当に失礼極まりないと思う。

が、ニツクがジャンナのお兄さん！？

「……………うん似てない。」

私も失礼極まりなかった。

だがニツクは無然とした様子。

「馬鹿が、俺はその子の兄じゃない。」

「そうそう！こんな可愛い妹、こんな仏頂面に渡して堪るか。」

ニツクの後ろから、ジャンナと同じ金掛かった銀色の髪に、同じ青い目を持った好青年が出て来た。胸には赤いペンダント。

「皆さん初めまして。ジャンナの兄、キリルと言います。お願いだからジャンナに手を出さぬように。」

おかしいな。私も女なのに、何か諭される。

「ジャンナ！入学おめでとう！兄さん嬉しいぞーっ！」

「ありがとう兄さん。私ね早速淋漓と仲良くなったのよ！」

好青年はジャンナのほっぺたをフニフニさせながら満面の笑みを見せる。

ジャンナはほっぺたをフニフニされながらもニッコリ笑って私を見た。

「そっかー、ジャンナに可愛い友達が出来て兄さん嬉しいぞー。」

ま、ジャンナの方が可愛いけどなー！」

失礼な奴である。

目の前でイチヤコきだした二人に、私は顔をしかめるしか出来ない。

そんな二人を見向きもしないニツクと、既につまらなくなって退散した双子。

なんとも変わった人達だが、なんとかやっていけるだろう…。

一度天井を仰ぎ、視線を元に戻すと、ニツクがテーブルに並べられ

た夕食を口に運んでいた。

後ろを向き壇上を見たが、既にクラス分けは終わっている。

私はニツクの隣を陣取り、目の前のフルーツタワーに手を伸ばす。

「お、おめえ、昨日の紅葉女じゃねえーか！」

フォークが喋りやがった。

しかも昨日廊下で喧嘩を売ってきた奴だ。

「誰が紅葉まんじゅうだ。」

「お前耳大丈夫か？」

「なにに言ってるんだあ？」

前と横からの集中攻撃。

しかもニツクには、耳を触られて全身に悪寒が……

冷たく新鮮なモモを一切れ口に入れて、ふと顔を上げた。  
後ろを向く。

「ジャンナ、入学祝いは何がいい？何でも兄さんに言っくらん。」

「入学祝いなんて要らないわ、兄さん！」

後ろを向くとまだこんな対話をしていた。

「なるほど、これがシスコンか。」

夕食が終わった後は各クラスの寮へ行った。  
アレクサンダー寮の前にそびえる創設者の顔が、誰かに似ている気がしたが思い出せなかった。

部屋は二人部屋でジャンナと私がペアになった。

二人で使うには申し分ない広さと、フカフカのベッド。  
タンスや机等の必要最低限の物は用意されている。

「中々いいかも。」

早速シャワーを浴びているジャンナが居ない部屋で、一人呟いてみる。

ポケットからニツクから貰ったガラス玉を出し、躊躇う事なく地面に叩きつける。

ぼおわわわぁん、とマヌケな音を発しながら私の荷物が姿を表した。  
箒に何本もの魔法瓶、分厚い教科書に、鍋やペンタクル模様の鏡、  
等魔法に使う道具がズラリだ。

「何に使うんだか……………」。

試しに自分の腕程の長さがある杖を一振りしてみる。

すると……………」

ぼんっ！

「ケツケツケ」

白い煙のオバケが嘲笑いに来た。

杖をへし折ってやろうかと思った。

## 第七話：フォークとシスコンが騒ぐ（後書き）

こんにちは

今回は多分、学校設定を更新する予定です！

学校設定は情報が増え次第更新したいと思っています。

さて、ようやく入学です！

淋漓ちゃんはどうなるんでしょうか。

私にもわかりません。笑

冗談です。

この小説はシリーズ化を考えているので、今後ともよろしくお願  
い  
します！

**番外編：パンドラ魔法学校説明（前書き）**

こんにちは！

今回は番外編です！

淋漓ちゃんとニックさんにして貰っちゃいましょう！  
それでは。

## 番外編：パンドラ魔法学校説明

「こんちわ。どうも、ゆーきりんりちゃんです。勇気凛々じゃあないよ?」

「真面目にやれ。」

「隣でふんぞり返ってるのは、変身魔法でなんと黒猫になっちゃうニック・カルヴァート君です。すごいすごい魔法ってすごい。パチパチパチ!」

「これからパンドラ魔法学校の大まかな説明をする。」  
「シカトか。」

### パンドラ魔法学校

世界（魔法界）有数の魔法学校。

常に魔法を体に宿し、清廉潔白な力を発する。

大切な人の為に、自分の為に、悪い事には決して魔法は使わず、人を喜ばせる魔法を教え込む魔法教育機関。（生徒手帳より）

全寮制の魔法学校で、学年は一年～五年まであり、クラスは四つ。寮はクラスごとに分けられ、学校の本館と中庭を囲むように、東西南北に配置されている。

本館には授業を行う各教室が置かれ、食事等をする講堂や校長室及び職員室、膨大な書物が置かれている図書館等がある。

本館から大分離れた場所には、時計塔があり、正午と真夜中に鐘が鳴る。

時計塔の頂上から見える風景はもの凄く綺麗で、告白やプロポーズを行う輩が多数いる。

校内では、殆どの事が魔法で操られていて、物や絵画が動いたり喋ったりするのも魔法である。

「なんかもう外見とか学校じゃないですよね。」

「もはやウェストミンスター宮殿みたくなってるし。」

「俺はあの造り、気に入っているけどな。」

「それにしても、魔法学校なんて本当にあるんですね。」

「魔法界だからな。」

「……………いやだから『魔法』自体が本当に有ったんだっていう。」

「君は何が言いたいんだ？」

「まあいい、次はクラスの紹介だ。」

「……………。」

## クラス紹介

クラスは全部で四つ。

それぞれクラスの特徴があり、それに値した人物がクラスに入れる。

・アレクサンダークラス  
ペンダントの色は赤。

正直で勇猛果敢な生徒が集う。

行動力があり、正義感に溢れた人物にふさわしいクラス。

創設者はジャック・アレクサンダー。

・キャロウクラス

ペンダントの色はオレンジ。

上品で可憐な女子だけを集めたクラス。

女の子はいつも可愛らしく（はーと）がモットー。

女子特有の優しい心と気品に満ちた子が入れる。

創設者はジンジャー・キャロウ。

・ベルナツプクラス

ペンダントの色は青。

努力家な博学多才が集うクラス。勉強家であり、知識を武器とする人が集まる。

創設者はルーク・ベルナツプ。

・エッジワースクラス

ペンダントの色は緑。

従順で騎士道精神が溢れた者が集う。

紳士的且つ誠実性の優れた人が集う。

圧倒的に男子が多いが、稀に女子もいる。

創設者はノア・エッジワース。

「そつえばニツク先輩、私気になってた事が有るんですよ！」

「……………何だ？」

「この世界に来てからやけに『アレクサンダー』って言葉を聞くんですよ。何なんですかね？」 「……………さあな。」

「何ですか今の若干の間。まあいいや。」

「じゃあお次は…………パンドラ魔法学校各教科。授業内容ですね。」

## 必修科目・教科

必修科目は魔術、飛行術、魔法史、魔術理論。

この他に好きな科目を下記（以外にも色々ある）から自分で選び授業を行う。

- ・天文学：星や月の光から、あらゆる事を読み取る。
- ・占星術：カードや水晶を使い運勢を占う。
- ・予言術：未来の事を見透かす目を鍛える。
- ・薬草術：色々な薬草を使い、薬や魔法薬を作る。
- ・自然魔術：風、雪、火、雷等の自然のものを操る。
- ・錬金術：貴金属等を変形させる力を養う。
- ・召喚術：魔方陣を使いあらゆる生物を召喚する授業。
- ・白魔術：天界の天使のお言葉。　・黒魔術：魔界の悪魔のお言葉。　・呪術：呪いについて。

「ちよと待た！」

「何だ。『っ』が抜けてるぞ。」「さつき冒頭の学校説明で、清廉潔白やら人の為やら言っていましたよね？」

「ああ、言っていた。」

「じゃあ何ですか最後の二項目は。」

「他にもあるぞ。闇魔術、厄魔、降霊術、妖霊術……」

ニツクは何の教科をとってるんですか？」

「天文学、占星術、自然魔術に薬草術だな。」

「あれ、黒魔術はとってないんですか？」

「お前少し黙れ……。」

「それは無理です。」

このコーナーもそろそろ終わりらしい、

そんな訳で、私達のこれからへの意気込みを語ってほしい訳です。」

「どんな訳だかさっぱり解らない。」

「私達これからどうなっちゃうんでしょう？」

「主人公はお前だろう。俺が知るか。」

「こーゆー物語の場合、私が死ぬか友達が死ぬか恋人が死ぬか……

あらどうしましょ。」

「勝手に殺すな。」

……お前恋人いるのか？」

「いませんよそんなの。何でそんな事聞くんですか？」

「いや別に。」

「即答ですね。」

ま、そんな事は置いといて、そろそろこのシケた内容終わりにしま  
しょうよ。」

「そうだな。」

「パンドラ魔法学校で繰り広げられるシツチャカメツチャカな学園  
ストーリー……！」

主人公私並びにニツクやジャンナ達はこれからどうなって行くのか  
！？

私の夢に出て来たあの門とは？

何故！私はこの世界に来てしまったのか……！！

今後証される幾つもの謎……！！

私とパンドラ魔法学校の知られざる関係とは……っ！？

今後乞うご期待……！！」

「……………ぜえはあぜえはあ」

「一息で言ったな。大した肺活量だ。」

## 第八話：数学少女の発動

授業は早速始まり、魔法訓練も始まり、忙しい日常が始まった。

私が選んだ選択科目は、占星術と自然魔術、召喚術に薬草術。自然魔術では風を操る事になっている。

まだまだだが、つむじ風程度なら起こせるようになった。

いつか忍者になってみよう！

意味不明な思考を無理矢理消去し、今日が初めての魔法理論の教室目指してドタバタと私は廊下を駆けた。

すると、

「淋漓じゃな！」

面倒臭いのに捕まった。

「何ですか陰陽師さん。」

壁の絵画の安倍晴明だ。

「とまどじつマムト。」

私は走り出した。

しみつたれ老人のギャグに付き合ってる暇は、今の私には無い。

長い廊下を通過し、階段を駆け上がり目当ての教室に入る。

教室に入ると、ジャンナが大きく手を振っていた。

「遅いわっ淋漓！」

三人掛け机の端に座るジャンナ。その隣に座り、私はローブを脱ぐ。

「暑いつ！」

「ねえ淋漓、今から始まる魔法理論の授業で大事なのは、数学なんですって！私は数学が苦手！」

「え、本当に？」

隣の空いてる席に畳んだローブを置く。

「ええ！授業はとってもハードらしいわよ。ついてけるかしら？」

「へえ。」

大丈夫。

数学には自信がある。

小さな頃から計算する能力だけは長けていた。

足算だろうが掛算だろうが四ケタだろうが十ケタだろうが何でもかかってこいだ。

「隣、いいかな？ここしか空いてなくて……。」

その声に、数式の中を泳いでいた私は現実に戻された。

上を向くと困った様に笑ってる少年が一人。

少しクセのある茶色い髪に、同じ茶色の瞳。

胸の赤いペンダントと、赤と銀のネクタイがやけに似合っている。

直ぐに私のローブを避けると、隣に腰掛けた。

「俺、ラロ。ラロ・ベルガンサって言うんだ。宜しく。」

「俺の両親が言ってたんだ。

パンドラ魔法学校の地下には、秘密の通路がある。」

「それ兄さんも言ってたわ。

その通路の先には……………」

「何があるの？」

「誰です！？喋ってるの！！」

魔法理論の授業中、こそこそとジャンナとラロに挟まれ、何故か『パンドラ怪談』と言うものを聞かされていた。

「結城さん。貴方ですか？」

「え、私？」

「そうです。一番最初の授業ですよ。私語を慎みなさい。全く何を考えているのですか。大体…」

小言を言い始めた先生を横目に、冷めた目で両隣を見るが、ジャンナもラロも目を反らす。

「どうやら『思いやり』という言葉を知らないらしい。  
今度教えてやろう。」

そして私は周りの生徒から集中的に見られている。

ちなみに今日の授業はアレクサンダークラスとベルナップクラスの  
合同。

頭のいい連中から、ものつそい冷たい視線が……。

「これは、魔法理論の中でも高度な数式です。  
このような数式が貴方に解けるかしら？」

その時初めて先生の後ろ、黒板を見た。  
魔法で数式が書かれている。  
全部で三十二ケタの数字。

「何だよアレ。嫌がらせ？」  
「まるで暗号ね。」

それにしても感じ悪い先生ね！  
「君たちも大して変わらないよ！」  
「……………」

両端から聞こえる小声にすかさず小声で返す。  
でも確かに。  
ここまで言われて黙ってられっか！

私は杖を手に取り、席を立った。

「淋漓？」

ジャンナの声を無視し、黒板の前に立つ。

黒板に杖を降ると文字がかかる。

よしっ！

この程度の数式、私には只のウォーミングアップにしかならない。頭の中で数字が交差し重なり消化される。

全ての数字が情報となり、水流の様に脳から杖を持つ手に流れ落ちる。

周りがざわざわし始めた頃、私は黒板から杖を離れた。

隣を見ると、先生の口に鳥の巣が出来そうな位、ポツカリ穴が。

「すげえ……。」

ラロの口から自然と声が漏れる。

瞬きもせずびくともしない先生の顔はホラー以外の何物でも無い。

ゾンビみたい……。

「先生どうですか？」

先生はやっと口をパクパクさせながら、私を見る。

「せ、せいせ、正解です……。」

周りからパチパチと拍手が上がった。

「じゃはー」

「聞いたかニック！」

「キリル……、何を？」

食事を摂るためニックは薬草術の教室から出た。  
そこには、ジャンナの兄キリルが待っていた。

「俺のかわいいー妹の友達の結城ちゃんっていたじゃん!？」

嬉しそうに笑う青い瞳を凝視しながら、入学直前に校長から頼まれた物件を思い出す。

「……」  
「ニック、明日から我がパンドラ魔法学校に入る結城淋漓ちゆう子が居るんじゃないかな、その子の『手伝い』を手伝って欲しいのじゃ」

「結城？誰ですか？」

「んー、どーしよつかのー？教えて上げよつかのー？うえっへっへっ……。」

「お疲れ様でした。」

「ままま、待つんじゃないっ！説明するとも。」

「手短にお願いします。」

「……お前も可愛くないのう。」

実はな、結城淋漓という子はじゃな……………」

「淋漓がどうかしたのか？」

キリルの目がキラリと光る。

「あの魔法理論のアガサ（先生）の目の前で、五年生でも解けるかわからない数式問題をたつたの三分で説いちまったんだ！！」

「やははー」と笑う淋漓の顔が目には浮かぶ。  
自然に頬が緩む。

「それは凄いな。」

「っだろ！！さっすが俺の妹の友人だ！もう学校中の噂さ！問題あっさり解かれたアガサが青い顔してさっき、職員室に入っていたよ。っはは！」

「にしてもお前、本当に妹バカだな。」

「何！？俺の妹はバカじゃないぞ！今の言葉撤回しろ！」

「……………面倒くせ。」

## 第八話：数学少女の発動（後書き）

こんにちは！

淋漓ちゃんがいよいよ計算し始めました。

計算機のように速くそして正確に、どんどん数式を解いていってほしいですね！

読者様やお気に入り登録に登録してくれている読者様には、とても嬉しく思い凄く感謝しています。

これからも精進して参りますので、よろしく願いします。

第九話：夢とふざけた飛行術と海

真っ暗な闇

多分ここは夢の中

「淋漓」

誰……？

若い男の人の声……

何処かで聴いた事あるような…

「誰なの？」

けれど真っ暗な闇の中には私しかいない

「淋漓……」

「何？何処にいるの？」

「淋漓」「淋漓」

今度は違う声だ。

凜と鈴の様な綺麗な女の人の声と、優しく穏やかそうな男の人の声  
……

全然憶えてないけれど、この声は……  
間違いない

「お母さんとお父さん？」

ねえ出て来て

何処にいるの？

何処を見ても只の闇しかない

言いようのない孤独感に、私はただ立ち尽くすしかなかった

パンドラ魔法学校全敷地の端の端に広い草原が広がっている。

「そっだ！そのまま前だ！」

「無理無理ー！っひゃーー！」

「……………」

ニツクと並行していた淋漓が、情けない声をしながら落ちていった。

「ジャンナ、こっだ！どうだ、すっおいだろー！」

「凄いわ兄さんー！」

「あはは、ジャンナこっちだー！」

手を繋ぎながら、優雅に空中散歩を楽しむジャンナとキリル。

「ジャンナ凄いなー。」

私は遙か上空を箒で飛ぶジャンナとキリルを仰ぎ見る。

入学式から何週間か過ぎたある昼下がり。

天気も良く、空気も新鮮、草木も緑一色で目の健康にもいい。

こんな日にはピクニック。

いや、中庭のベンチで日向ぼっこ読書もいいな。

ま、人生なんてそう簡単には行かない。

今私たちが何をしているかというと……

じゃじゃーん！！！！

ニック先生とキリル先生のー

レッツ！箒で空を飛ばう！！

〜楽しく学ぶ飛行術〜

「いやおかしいでしょ。」

全っ然楽しくないよコレ。」

飛べない可哀想な私に（大きなお世話じゃい！）ニックとキリルが飛行術を教えてくれる事になった。

転がっている箒を軽く足で突いていると、空を飛んでいたニックが華麗に着地した。

ひらりと翻る黒いローブと、風で少し乱れる黒髪、それと対照的な白い肌。

日光の光も手伝って金色の瞳が宝石の様に輝く。  
何だか全てが……………

「眩しっ!」

「何がだ。」

いいからさっさと飛ぶぞ。」

「へーへー。」

落ちても痛くないようにニックとキリルが地面に魔法をかけてくれた。

筈にまたがりその地面を軽く蹴る。

するとふわりと私の身体が持ち上がる。

だがこれが中々難しい。

「最初は体勢を低くするんだ。」

ニックの姿を見よう見まねで真似するが、

「そんな事したら落ちるに決まってるでひょあー!」

「……………はあ。」

ファサ……………

落ちた原っぱに寝そべり上空を見上げると、  
旋回する黒い塊<sup>ニック</sup>。  
空の明るさと正反対の黒。

闇の中に立ちすくす夢を思い出す。

「あの夢は何だったんだろう……………」

私に話しかけたのは誰だろう、もしかしたらあの夢には……………

「何か理由があるのかも。」

私が呟いたのと同時に、中々起き上がらない私を心配してか、ニックが降りてきた。

「……………淋瀝、どうした？」

降りてきたニックを無視し、私は目を閉じる。

目を閉じると聴覚から嗅覚、身体の神経が研ぎ澄まされる。

そよぐ風が気持ち良くてこのまま眠ってしまいそうになった。  
そんな時……………

「淋瀝？なんだ寝たのか？」

やけにニックの声が近いのだ。

ゆっくり瞼を開くと、キスが出来そうな程ニックの顔が迫っていた。

「っわあああああ！ー！」

慌てて起き上がり立ち上がり箒を引つ掴みまたぎ地を蹴る。

すると、ぶわりと風が舞い上がり箒ごと私の身体を持ち上げ、空を舞った。

「……………飛べた……………」

下ではニツクが眩しそうに私を見上げている。  
まあ、少々やり方は違うが、飛べた事に違いない。

手に持つ箒の柄にアレクサンダーAAと彫つてある。  
その柄をぎゅっと握りしめ、加速する箒に身を任せた。

学校の上空を、風や鳥と一緒に翔る。

学校の屋根を滑る様に飛び、周りを見渡す。

すると、色々な店が集うキャンデイクロスに、その周りを囲む様に  
森がもりもりもり、そしてその奥には - - - - -

「海だ……………!!」

太陽の光でキラキラ輝く海…

全ての自然を司るに相応しい真つ青な海面…………

「綺麗……………」

遠く広がる海の奥には、一直線の水平線…………

「今度行ってみよう!」

私は、まばゆい光を放つ宝石の様な海を見つめた。

学校周りを一回りした私は、元の原っぱに戻ってきた。

けど降りるときにへマをし、

「ひいやああああ！！」

落ちた。

バサリと音がして柔らかい感触。そこは地面じゃない。そう判断した私の目に映ったのは、ニツクの首元だった。

「わっわっわっ！！」

「悪いな、もう大丈夫かと思って地面の魔法を解いちゃったんだ。」

ニツクは落ちた私を抱き抱だえていた。

ニヤリと笑うニツク。

「飛べたじゃないか。」

思わず赤面したが、直ぐに顔を下に向け目を反らした。

「わー淋漓とニツク、ラブラブだわ！」

「んーだなー。ジャンナ、ほらあっちにリスが居るぞー」

「わあー本当！

可愛いわ兄さん！」

## 第十話：水晶に写る不吉な陰

少々薄暗い教室に、天井からぶら下がる幾つもの人形。

両端にかかる赤い幕。

悪趣味極まりないこの部屋、実は占星術の教室。  
授業をする最も理想的な造りらしい。

今日の占星術の授業は、アレクサンダークラスとエッジワースクラスの合同。

それイコール男子が多い。

つまり……………

「男子って本当に嫌だわ。」

隣に座るジャンナが心底嫌そうな顔をする。

「ジャンナ、まだ授業始まってもないよ。」

周りを見渡すと、エッジワースカラー緑と銀のシマシマネクタイを身に付けた男子が目  
に着く。

「不潔でガサツでバカで……………」

どうして男子って皆ああなのかしら。」

「ふああー、俺も男です。」

ジャンナの辛辣な言葉に、私のもう片側のラロが欠伸をしながら答える。

授業の各教室は三人掛け机。

いつの間にかジャンナ、私、ラロの順で座るのが習慣になっていた。

「んでもさ、やっぱり騎士道まっしぐらって感じるよな。」

「なんつーの？しっかりしてるっつーか、強そうっていつか。」

「確かに。」

「でも男子は嫌いよ。」

「そうかいそりゃ残念。」

シエスタシエスタ（昼寝）、そう言いながらラロは眠りについてしまった。

「ラロ、授業始まるよ?」

「ほつときなさいよ淋漓。」

スペインっ子は居眠りが生き甲斐なのよ。」

『四人で一組になり、水晶玉を囲み未来を見つめる』

一見女とは思えないおぞましいフラン先生が、両手を上に上げ気味悪い声で授業を始めた。

私達三人は、男子だらけエッジワースクラスの中から超レアな女子を見つけた。

赤髪のボサボサ頭に、鮮やかなオレンジ色の瞳。  
その瞳は、クリっとしている、……………筈なのだが今は半分閉じている。

所謂、ジト目ってやつだ。

「わたし、ジャンヌ・ギャロワと申しますだ。宜しくだ。」

それに、ひどく訛りのある喋り方。

だが、ピンと張った胸と真っ直ぐな視線（ジト目だが）がとても頼もしく見える。

……………いや見えないかも。

「私の名前とそっくりだわ。」

「んだなー。ジャンヌとジャンナ、偶然ってすんげーなー。」

「貴方凄く訛ってるけど、それ何とかならないの？」

「ジャンナさん、そりゃ無理があんべよ。」

所々濁点がついているジャンヌの訛りと、何のクセもないジャンナの会話が面白い。

隣で寝ているはずのラロも、時々笑いだす。不気味だ。

「まあいいわ。」

さ、早く占いを始めましょー！」

四人（一人シエスタ中）で水晶玉を囲み、ジャンナが手をかざす。

「汝の行く先、姿を映せ！」

凜とした声で呪文を発すると、水晶に映像が流れだした。

「これは？」

「どうゆーこつたべなー？」

「大きな樹に大きなライオン？ 一体何を表すのかしら？」

私は手元にあつた分厚い魔本を開き調べてみる。

薄暗い森の中に一頭のライオン。一体これは何を表しているのか？  
パラパラと捲っていると、よく似た挿絵の載っているページにたどり着いた。

「これじゃない？」

「あんれえー！挿絵で見つと、余計不気味んだな。」

「薄暗く陰湿な森は、何か良くない事が起こる前兆……………」

「特に大きな樹には要注意、大きな災いが……………つて、私大変じゃない！怖いわ！」

だがこのページにはライオンの事が載ってない。

一旦目次に戻り、動物欄を見るとそこにライオンはあつた。

「ライオンは貴方にとって大きな味方、どんな災いにも大きな守護神となる。」

よかつたね、ジャンナ。」

「んだんだ。」

「ええ何だか安心したわ。」

三人で笑つた後に私はもう一度水晶玉を見た。  
けれどももうそこには何も映ってなかった。

ライオンの話で安心した。

その善なのに、何だろっ、この胸騒ぎは……。

私はこれから何か不吉な事が起こるような気がしてならなかった。

第十話：水晶に写る不吉な陰（後書き）

不吉ですねー。

どうなっちゃうんでしょジャンナ様！

これから色々勃発して行きます。あんな事や変な事、もぞもぞと創作していきますので、これからも宜しくお願いします！

## 第十一話：憂鬱は重なる

『憂鬱は重なるもの』

じゃあかあしーわ!!

誰だそんな無責任な事言ったの!

夕食後。

アレクサンダー寮の一階、談話室で私は水晶玉とにらめっこをしていた。

ジャンナとラロは今日が提出期限の、薬草術のレポートを提出しに行った。

「んー?この水晶どういう仕組みなんだ?何で映像が映るんだろう?」

ここが魔法の世界って事も、水晶に映る映像も魔法の力、って分かっている。

これでも随分魔法に慣れた。

「でも性格柄考えちゃうんですよねー。」

どっからどうみても透明。

特別な光等が無いかぎり映像を作る事は難しいだろう。

今日の授業で映った森とライオン……………。

どういう仕組みだ？

私が水晶玉を持ち上げたり掌で転がしたりしていると、不意に水晶に人影が映った。

「あれ？」

よく注視するとその人物はニツクだった。

相変わらず仏頂面で、ていうか何か太った？

いつもスラッとしているニツクが、何だか横に広がっている。

「ぷっ、あはははは！」

「何一人で笑ってんだ。」

「うわあああああ！！！」

突然の本人と思わしき声が後ろから聞こえ、私は絶叫だけでは飽き足らず水晶を持っていた手を振り上げてしまった。

「あ！」

宙に弧を描いた重たい水晶は、落下速度を増し落ちていく。

割れる！

「止まれ（スターテイル）！」

水晶の割れる音の代わりにニツクの声が聞こえた。  
最初に目に入ったのは、水晶に杖を向けてるニツク、その先には地面すれすれで宙に浮く水晶だった。

「凄い……………」

ニツクはひょいと水晶を引き寄せテーブルの元の場所に置いた。  
そして顔をしかめる。

「危ないだろ。」

「む、急に後ろから声かけない下さいよ！」

「お前の後ろに立った俺の姿が、水晶の曲面で太って見えてただろ。」

それを見て一人で笑ってたから、気付いてたと思ったんだがな。

上から視線でニツクが言う。

……………憂鬱だ。

そこで私は気が付いた。

……………そうか、反射か。

確かにあの微妙に薄暗い教室と、天井に飾ってある奇妙な人形達。

何かの具合で偶然……………

って事にはならないかしら？  
ならないな。

「……………」  
「どうした？」

急に黙りこくる私に、ニツクがチョコを口に放り込みながら尋ねる。私は今日占星術の授業で起こった事と、さっきまで私が考えてた事をニツクに話した。

「残念ながら科学で解明出来ない事自体が魔法だ。

何でも科学で解明出来ると思ったら大間違いだ。」

「！じゃあ！……………」

何で魔術理論には数式を用いるんだよ。

そう言いたいのをぐっと堪える。どうせ言った所で魔法使いは、聞く耳持たないだろう。

全く憂鬱極まりない。

私だって科学だけを信用してる訳じゃない。

ここに来てから、魔法っていいなあ、と思うようになったのは確かだ。

空も飛べるし、物が生きているかのように動くし、色々な事が自分の思い通りになる。

けれど時々不安になる。

どこから発生しているのか分からない魔法。

それを扱っている時の浮遊感が不安を生み、私の中でじわじわ広がり自分の立っている場所を見失う。

今日の占いだってそうだ。

何の根拠も確証も無い水晶占い。

当たる可能性が百パーセント有るわけでもないのに、こんなにゾワ

ソワするのは、

「何でなのよ!?!」

「だから!行く場所が同じだったからつってんだろ!誰もお前の後を追っ掛けてた訳じゃ無いから。」

「少年!俺の妹に手を出してはならんぞ!」

どどん落ちていく私のテンションを引き止めたのは、薬草術の教室から戻ってきたジャンナとラロの会話だった。何故かキリルも居る。

「は?妹?女なんて何処にいますか。」

ジャンナを女として見てないラロに、キリルがキレました。

「こんのクソガキがつ!!」

キリルの怒号が聞こえた途端、コポッと音を発しながら私達を何か包み込んだ。

「っ!?!?」

水だ。

しかも見渡すと水に囲まれてるのは私とラロだけ。ジャンナとキリルとニツクには何の変化もなかった。

「少年、あんまり調子に乗ると、どうなるか……………」

キリルの不適な声が聞こえる。

何で私まで、こうならないといけないんだ。  
憂鬱どころかキレルぞ！

っていうかめっちゃ苦しいんだけど！

息が出来ないよー

苦しいっ苦しいっ！

「んんーっ！！」

ブクブクと気泡が上に向かっていく。

その気泡を名残惜しそうに見つめていた私の腰が引っ張られ、水中から抜け出す事が出来た。

「はあ、ゲホゲホツ、ありがと、はあ、ニツク」

黙って背中を擦さすってくれるニツクの大きな手に大分落ち着いた私は  
ラロの方に顔を上げた。

すると空中に浮く丸い水玉。

その中にふよふよと、ラロが浮いている。

何だか……………

「北海道土産のマリモみたいだ。」

「あれはキリルの自然魔法だ。」

あいつは水を自由に操れる。」

「わぁー！！！！」

ニツクがわしゃわしゃとタオルで頭を拭いてくれた。

制服はもちろん、身体中がびしょびしょなのに何故か寒く無い。逆に暑いくらいだ。

ニツクの魔法だろうか？

「兄さんもういいわよ。死んじゃうわ！」

「んーそっかあ、ジャンナの頼みだったら兄さん何でも聞いちゃうぞー！」

シスコンのシスコン具合に憂鬱になる。

シスコンが魔法を解こうとした時、ラロの入っている水玉がシューッと音を立て煙を上げた。

「何だ……………っ?!」

「……………水が…どうして…?」

「蒸発した……………」

あっという間にラロの周りの水が蒸発し、水が一滴も付けていない体が地面に着地した。

今度はラロが不適に笑った。

「へえ、中々やるじゃないか。

発火魔法か。」

ニツクの言葉に、私はキョトン、ジャンナもキョトン、シスコンはポカン。

「本来火は水に適わない。

けど、火が駄目なら熱に変えればいい。」

そうか、さっきまで異常に暑かったのはコイツのせいか。

少しくルクルした茶色い髪の間から、同色の瞳が覗く。  
ニヤリと笑うラロ。

悔しそうに舌打ちするキリル。  
へっへっへっ、ざまあ。

「俺はスペイン生まれスペイン育ち。紅き闘牛士マタドールで有名な街で培われてきた炎だ。

『情熱』に関しては負けない。」

そんな子供騙しの『水』にやられて堪るか。

仮にも先輩のキリルに向かってそう吐き捨てて、談話室から男子寮へ繋がる扉へ向かう。

私の横を通る時ニンマリ笑った。

「おやすみ。」

「……………おやすみ。」

返事した時には既に扉の向こうに消えていた。

へくしつとくしゃみが出た。

ラロが居なくなっただけから急に部屋が冷え込んだ。

おまけに白けた。

壁に掛かっている時計を見るともう九時を回っていた。

「げっ、もうこんな時間!？」

ジャンナ、もう部屋行こうよ。「ええ、私も眠いわ。

兄さん元気出してね!」

「ああ可愛いジャンナ、

おいそこの少女!ジャンナを宜しく頼むぞ!」

コイツ謝りもしないのか！  
警察よぶぞコラ。

「風邪ひくなよ。」

ニツクの言葉に、今自分の体温を改めて感じる。

背中に寒気が走り、

嫌な予感。

「へっくしょーん！ー！！」

憂鬱だ！！

## 第十二話：動きだす闇

あ、あの門がある……………。

いつもこの夢ばかり見ていた…

私がこの世界へ来たあの扉……………

一面の草原

綺麗な青空

壮大に構える門

今、雨は降っていない。

トンつと扉を触ってみる。

暖かい木の感触が伝わった。

このまま元の世界に戻って……………

「淋漓……………」

突然後ろから声がし、驚いて振り返る。

「……………貴方は……………」

夢でしか見た事のない人なのに、何故か何処かで見た気がする。

「私の名前はジャック。」

右手を胸にあて自己紹介する彼は、いつも見る門の夢に出てくる人だ。

長く降り続く雨の下で、門に向かって泣き崩れる青年の顔と一致する。

けど今の顔は穏やかに笑っている。

「淋漓、恐がらないで聞いて欲しい。」

黒いローブに身を包んだジャックと名乗る青年は、一歩私に近づき耳元で囁く。

風が微かに動く。

「いいかい？」

パンドラ魔法学校アレクサンダー寮の談話室、マントルピース（暖炉）の前で、こういうんだ。」

さっきまで晴れていた空にどんよりした雲が覆い被さる。

風が強くなり地面の草が騒めく。

「分かったね？」

淋漓、もうお行き。」

ジャックの手が背中を押すと同時に、空から雷の音が轟く。

もう直ぐ雨が降るのだ。

「待つて、貴方は誰？  
どうして私の事知って……………」

ポツン、ポツンと水の雫が頬つぺたに落ちてきた。

「さあ、早く。」

大丈夫、淋漓なら大丈夫。」

だから何が？

最後の言葉は言葉にならず、私は目覚めた。

「淋漓!?!」

「…………つ。な、何?」

「さっきからぼーっとしてばかりよ?体調でも悪いの?」

目の前に陳列する食事の山、学校の食堂にしては豪華過ぎる昼食を、私とジャンナはとっていた。

けれどいつの間にか、今朝の夢ばかりを考えてしまう。

こういう事はさっさと友人に相談すべし。よし!

「具合は悪くないよ。」

けどさ、朝起きたら奇妙な夢の記憶が……………」

「奇妙な夢？」

それは悪い意味での？」

私は夢の内容を大まかに説明する。

するとジャンナはチキンをむしゃむしゃしながら、少し考える素振りした後、突飛な事を言い出した。

「寝ている間の出来事の相談は眠りの達人に聞きましょう！」

「眠りの達人って何？誰？」

「ラロよ！アレならきつと夢のシステムも解るはずよ！」

男を毛嫌いしていたジャンナが自分でラロ（男の名前）を言った。しかも頼りにしている。

明日は雪かな。雪で済めばいいけど。

「今失礼な事考えたわね。」

「……………」

珍しい、ジャンナが男を頼りにするなんて。」

「思ったら兄さんに楯突いたのってラロが初めてなの。」

いつも守ってくれる兄さんを前に、皆適わないの。それで皆私を変な目で見ると。

何だアイツ、みたいな目で！

本っ当男って大っ嫌い！」

そう一気に言ったジャンナはコップに入った飲み物も一気飲みした。

ちなみに今日の飲み物は、「お前は天才だー！（サイダー）」。

何なんだろうこのセンスを疑わざるを得ないネーミングセンスは。

サイダーを頭の片隅に追いやり、ラロが理不尽なキリルの魔法にかかり反撃した情景を思い出す。

あれから私は見事に風邪をひき、ラロの熱とジャンナの冷えピタ（何であんの？）で看病された。

「でもラロは普通の男共と違っと思って思ったの。」

私からみたら裁判沙汰同然の災難だが、ジャンナにとっては思わぬ転機となっただけらしい。

「よし、じゃ早速。」

「は？夢？システム？知るかなもん。」

面倒臭そうに箒を加速させるラロ。

本日五時限目の授業は飛行術。

私たちいつもの三人は箒で悠々と空飛ぶ。

ニツクに教えてもらった事もあり、私は箒を大分コントロール出来るようになった。

「ラロはいつもどんな夢を見てるの？」

時々飛んでくる障害物を避けながらラロは淡々と喋りだした。

「綺麗なお姉さんとデートに行く夢、ふかふかのベッドで寝る夢、空を飛ぶ夢、雲を食べる夢、闘牛場にたたずむ夢、星が落ちてくる夢、好物のどら焼を食べる夢。」

どら焼……………。

「やっぱり男子って解んないわ！」

ジャンナが下降して行く。

その後を追う私とラロ。

「カルガモの親子かよ。」

ラロの呟きも虚しく私達は母親の後についていった。

真っ黒な城が闇に佇んでいる。

後ろに昇る三日月が気色悪さを倍にする。

白と黒の大理石で出来た、チェスボードのような床。

その上に立っている長身の男。

その周りに飛ぶ気持ちの悪い生き物、コウモリだ。

手には水晶玉が乗っており、今さっきの淋漓達が映っている。

「カルガモの親子かあ。」

ニタリと歪む口。

「後一つだ……後、一つ！」

紅い目がキラキラと光り、水晶玉を持っている手に力が入って行く。  
パリンツと音を発し水晶が粉々に砕け散る。

そして男は嗤った。

「待っている、結城淋漓。」

「ん？」

何か声が聞こえた気がする。  
けど、聞いた事の無い声だし、  
「気のせいか。」

赤い絨毯を踏み、ジャンナとラロの待つアレクサンダー寮談話室、  
マントルピースの前へ急いだ。

### 第十三話：邪魔者を排除せよ！

私達はマントルピースの前にいた。

季節はもう初夏、当然火は付いてない。

真っ暗なマントルピースの中を覗くが、特に変わった様子もない。

「取り敢えず、そのジャックつて奴が言ったのを実行してみるよ。」

ラロが呑気に欠伸をしながら言う。

「じゃ、じゃあやるよ?。」

正直怖いがここまで来てやらない訳にはいかない。

ジャンナが腕を組んでくる。

すうと息を吸って、声を出そうとしたが、

「なーにしてんのかなぁー?。」

聞こえたのは私の声でなく。

「「「.....。」「」」

中々良い・・・（タイミングでいらっしやる。

振り向くとそこには、ニックとキリルが立っていた。

「一年生同士でつるんで一体何をしでかすのかな？」

いや普通一年生同士でしょ。こづいつのは。

キリルがニタニタしながら私達三人の周りをうるちよろする。

ニツクはソファアに座り傍観している。

「もう兄さん！急に何よ！」

「私達忙しい……んです。」「シスコンは黙ってあっち行って下さい。目障りです。」

三人の集中攻撃に、キリルは捨てられた子犬の用にしょんぼりし始めた。

「ラロ、本当の事言っちゃ駄目だよ。」

「あ、そうだった。本当の事言っちゃ駄目だね。」

私とラロの会話に、隣のジャンナがクスクス笑う。それを見たキリルが、この世の終わりの様な顔して、ニツクの座るソファアに突っ伏した。

ニツクが柄にもなくキリルの背中をポンポンする。

「で、本当に何を企んでるんだ？」

金色の瞳が私達を見つめる。

「えっとー、」

「それはですね〜」

「……………タカラサガシ……………?」「どうしてカタコトなのよ。」

どう答えよう？

ただの宝探しで納得するか？

否、するはず無い。

「どうした？ただの宝探しとは少し違うようだが？」

ニヤリと笑うニツクに、どう答えようか迷っていたその時、

「もうすぐ！？」「夏！！」「ルナ！と言うことは？」「パンドラ  
校定番！！」「エストレージャ星願祭！！」「」

けたたましく入って来た双子のルカとルナ。

そして間髪入れずに、双子ならではの見事な会話を繰り広げる。

「やあ！淋漓！」「ジャンナにラロ！」「悪戯しようとしてるだろ？」「顔に書いてあるよ！」「でもここに？」「ニツクたちが居て？」「何にも出来なーい！」

ニタニタと笑いながら二人は顔を見合わせる。

「よって俺等が！」「手助けをする！」「何故か？」「悪戯する奴は皆仲間さ！」

ルカとルナはポツケから何か出すとすかさず地面に叩きつけた。

「行け淋漓！！」「俺等の友よ！」「姿ク라마セー！！」「」

途端にポワンポワンポワンと青色の煙がモクモクし始め、ニツクたちから私達が見えなくなる。

「今よ淋漓!!」

「早く言え!!」

何でそんなに必死なんだ!?

まあいいや!

『アレクサンダー寮マントルピースよ、我が友への道を開きたまえ。』

後ろを見るがまだ煙が薄れていない。

ゴッホゴッホとニツクとキリルの咳き込みが聞こえる。

おまけにケラケラ笑う双子の声も聞こえる。

ゴゴゴつと音がし、前に向き直ると、マントルピースのレンガが動き、地下に繋がる階段が見えた。

「わお。」

「凄いわ。」

「……………面白そー 行くか!」

ニツクとキリルが追ってくる前に暖炉の中へ潜り込む。

本当はニツクやキリルの様な、魔法使いの先輩を連れて行った方が危険は無いと思った。

だが、好奇心は一丁前。

少しだが今まで習ってきた魔法は何処まで通用するのか。

「ドキドキするわ!」

「この寮にこんな地下があったのか。」

後ろを振り返るとマントルピースは、ゴゴゴと音を立ててから閉じられていた。

これでもう誰も追ってこれない。

私は杖を出し灯りを着けた。

「よし、行くところ！」

双子の放ったメクラシ玉（目がしみ、咳が出て、人により吐血する）の煙が消えた頃、俺は談話室を見回す。だがそこに双子と淋漓達の姿は無く、隣の埴輪の様な顔をし石器化しているキリルが居るだけだった。

「おい、なんだお前死んだのか？」

微動だにしないキリルに気味悪さを感じ、視線をマントルピースに向ける。

確か三人はそのマントルピースの前にいた。

が、今はいない。

もちろんマントルピース内には煙突があるが、そこに入ったとも考

えにくい。

何処に行ったんだ？

あのタヌキ（校長）から、淋漓が危険な目に遭いそうだったら命が  
けで助ける、と言われてる。

タヌキの目がマジだったので、もし淋漓に何かあったら、俺が死刑  
執行間違いなしだ。

不意に隣のキリルの首がこちらに曲がる。  
首から下が一切動かないのが気持ち悪い。

「ニツク。俺、泣いていい？」

しかも真顔。

「嫌だ、止める、あっち行け！」

「ニツクー！ジャンナに嫌われたー俺はどうすれば、どうすれば  
ー！ー！」

暫く騒いでいたら、アレクサンダー鬼の寮長にどやされた。

「君達、一週間トイレ掃除ね。」「」「………はい。」「」

**第十三話：邪魔者を排除せよ！（後書き）**

こんにちは。

此処まで読んで下さりありがとうございます！

自分の物語を読み返していつも思うのが、時々変な方向に行ってしまうんですね…。

こんな私が作った物語を読んでくれている読者様に深く感謝です！

## 第十四話：地下のお墓

階段を全部降りると、そこから狭い一本道に通じた。

「暗くて寒いわ……」

「なあ、知ってるか？パンドラ怪談の一つ。地下に住む亡霊。」

確か魔法理論の初授業で、先生に喧嘩を売られ才子を聞けなかったやつだ。

「ラロってそう言うのやけに詳しいけど何で？」

「へ？いや親の母校だしさ。」

そういう話沢山聞くし。」

「え？じ、じゃあ親も魔法使い!？」

「うん。」

なんだか奥が深いな魔法界。

「それで？その亡霊は何処に居るの？」

ジャンナが話をすり替える。

他人の家族などどうだっていいという風だ。

「うん、その亡霊、実は一人だけじゃないらしいんだ。」

「いっぱいいるのかしら？」

「ああ、父さんの話だと五人。」

暗闇の道をゆっくり進んでいく。

五人も亡霊が居るって、校内にもオバケらしき白い塊が浮いてるが、あれはなんなんだ。地縛霊辺りだろうか。

「淋漓……………」

「何かある……………」

一気に道が広くなったと思ったら、広い洞窟の様な所に出た。光を当ててないのに、そこだけ青白く浮かび上がっている。

一歩一歩ゆっくり進むと、地面から出ている十字架。

これって……………」

まさか、

「ジーザス・クライスト……！！」

「アホ。お墓じゃボケ。」

腑<sup>ふぬ</sup>抜けたラロの呟きに、場の緊張感が一気に失せた。

よく見ると十字架の中心に、アレクサンダークラスのペンダントが掛かっている。

埃が被っているが若干赤いのが見える。

私達のと全く一緒だ。

「こんな所にお墓？」

それに、誰のお墓かしら？」

ジャンナが名前が掘ってある墓石を見るが、埃がもっさりかかっている何も見えない。

「相当古いなー。」

ホコリが積もってる。」

「状況から見ると、ここに埋められているのは、アレクサンダーラスの生徒だった人。」

ジャンナと私で墓全体のホコリを払っていると、ラロが後ろで分析を始めた。

「でもこんな地下に墓を立てるといふことは、………学校にとって、とても重要な存在か、それとも………」

「………それとも？」

「学校にとって、こんな地下に閉じ込めて置かないとヤバい存在、………つまり罪人。」

洞窟の所為がよく通るラロの声音に、背筋が凍った。

「それは違うわ。」

もし閉じ込めて置かないといけないとしても、どうして淋漓の夢に出てきて、しかもここまで来れる暗号を教えてくれたの？」

ホコリを吸わぬ様鼻を摘んでるから、声が可笑しい。

「そりゃ、決まってるだろ。」

淋漓を利用して、墓から解放される為さ。」

冷たいラロの声に、洞窟の冷気も借りて背中にゾクリと寒気が走った。

だが直ぐにラロは声のトーンを上げた。

「でもまあ確かに、淋漓がマントルピースに入るときも、『我が友』  
つったしな。」

悪い意味合いは無いと思う。

けど、用心するに越したこたあない。」

眠そうに大あくびしたラロが、墓石を覗き込む。

「何々、本当に古いなコレ。」

文字が消えかかっている。

えーっと、

『永遠に眠りしジャック・アレクサンダー』

……つて、

「え？」

夢に出てきた青年と同じ名前。

「ジャック・アレクサンダーって、アレクサンダークラスの創設者  
で、パンドラ魔法学校の一代目校長じゃない……。。」

なんじゃそりゃ!?

わたしや知らんぞ!!

知識豊富なジャンナとラロに比べ、私ったら何をしてるんだ…。

頭を抱えながら呟く。

「何でそんな人が私の夢に出てきたんだろ。」

ジャックの墓の前に、彼が私に何をさせたいのかを考えるが、どうにも巧く頭が回らない。

「待てよ、さつき淋漓は、マントルピースを前に、ジャックから聞かされた言葉を言った。」

「う、うん。言った。」

「『我が友』と言った時点で、ジャックは淋漓に自分の墓を見て欲しかったんじゃない……。』」

青白い光が私達を照らす。

十字架を見ると、アレクサnderのペンダントが輝いている。

「多分、どの寮の地下にもクラスの創設者が眠っているわ。

そこでさつきラロの言っていた五人の亡霊よ！

本来、クラスは四つ。それなら地下に出る亡霊は四人の筈。」

ジャンナの青い瞳が光る。

私はジャックの墓に触れる。

「五人目の亡霊が、ジャックの言いたい事？」

五人目の亡霊が、ジャックの言っている『我が友』なの？

「どこかに、他の墓と繋がる道があるとと思うん……………」

「しっ！！何か近づいて来るわ！」

ジャンナの緊迫した声に、身体に緊張が走る。

私達が通ってきた狭い通路から、何か近づいてくる。

通路の奥は真っ暗で何も見えない。

「おかしいな。」

確かにマントルピースが閉じるのを見たのに……。」

私達を通って来た道は一本道。

誰も入って来られる状態じゃないのに。」

「ヤバいな、ここには隠れる場所が無いぞ！」

「と、とりあえず杖を構えて……。」

やっぱりニツクとシスコン、連れてくるんだった！

今さらだが、我がアレクサンダークラス三年の主席はニツクらしい。そして次席がキリル。

ふざけた話には私は後悔した。

ニツクはともかく、あのシスコンまで成績上位とは、私は光り輝く神になれるな。

じわじわ近づいてくる気配は、足音に変化した。

気配で分かるその不気味さに、思わず戦慄が走る。

「仕方無いわ！ここは、」

小声でジャンナが私達を連れて十字架の裏側に息を潜める。

コツコツ、とゆっくりだが、着実に近づいてくる足音。

「いい？これはワープリング。」

ジャンナが自分の薬指から抜いたシルバーの指輪を私達に見せる。

「兄さんから貰ったの。」

これを使えば談話室に戻るわ。」

「よし！」

「でかしたジャンナ！」

「さ、早く輪になって。」

足音がさつきよりも大きくなっている。

「手は絶対話しちゃ駄目よ！」

チャリン、とジャンナがリングを親指で弾く。

「アレクサンダー寮談話室へ！」

ジャンナの叫びにリングが大きく光り、私達は手を固く結んだ。

しん、と静まり返る墓場。

そこには誰も居なく、時が止まっている様。

青白い光だけが儚くジャックの墓を照らしだしていた。

## 第十五話：天井から落ちて来る者あり

「アレクサンダー鬼の寮長の説教!」「いやーっ、ご苦労さん!」

ルカとルナがケロリ笑いながら談話室に戻って来た。

「お前等……………」

ニツクとキリルはギロツと一睨み。

「おい双子!俺の可愛いージャンナを何処へやった!？」

「淋漓は?確実に安全何だろうな?」

ニツク達の喧嘩腰な言葉に、双子は柔らかく笑う。

「大丈夫!」「心配無いさ。な?ルカ?」「ああ!その内ひよっこり空から降ってくるさ!」

能天気な声にキリルが口を歪ます。

「はっ、空から人が降って来る訳ねえだろ。

寝言は寝て言え。」

キリルの口調がだんだん汚くなる。

これは怒っている証拠だ。

だがそんな雰囲気纏うキリルを気にしない双子。

「やだなーシスコ……、いやキリル君!」「俺達は起きてる!」「  
覚醒している!」「つまり、寝言ではなーい!!」「淋漓達は必ず  
!」「空から降ってくるー!!!」「」

どこから来るんだ、その根拠は。

ニツクはため息をつきながらふと考える。

こいつらの得意科目は確か…。

「お前等の口から出任せに付き合ってる暇は、」

「まてキリル。ルカとルナは…」

グイン……………

「わー!ー!」

「きゃー!ー!」

ニツクの声を遮り、空から淋漓達が降ってきた。

ワープリングって、色々な場所や時代に行ったりする事が出来るの。  
物によってはとっても高性能だけど、私が持ってたのは場所だけし  
か行き来できないの。

中には時代を越え、何世紀も前に遡みなかのほったりする事だって出来るわ。

何やらジャンナの解説が聞こえたと思ったら、

「わーーーー!!」

「きゃーーーー!!」

バサリと落ちる。

「うえ!!」

目を開くと場所は談話室。

上を向くと、天井にあったワイプリングがジャンナの手に戻る頃だった。

「天井から落ちてきたのか。」

本当に談話室に戻ってきた。

そう思いながら、高い天井を見上げる。

高い所から落ちてきたのに、この微妙な鈍痛はなんだろう？

あまり感じない痛みに不思議に思っていると、私が座ってる地面が揺らいだ。

「わっ!!」

その次に不機嫌そうなニツクの声が聞こえた。

「いきなり上から降ってくるな。」

「ありゃま、これはこれは……」

「こんばんは。」

「ふざけるな。」

どうやら私は、ニックの上に落ちてそのまま踏み潰していたらしい。立ち上がりながら周りを見回すと、何だがおかしな事になっていた。私はニックの上に落ち、ジャンナはキリルの上に落ち今も目の前でイチャしてるし、その奥では何故かラロが双子と悪戯の話で盛り上がっている。

「人口密度高くない？」

でも……

「帰ってこれた……」

さっきまで緊張で強ばっていた身体も、落ち着きを取り戻す。

「そうか、ルカとルナは予言術がずば抜けてたな……。」

「ああ、つまり……、そういう事だ。」

ニックとキリルが私達を見て何やら話している。

コクつと首を傾げたが、何にもならなかった。

もう一度ニックを見ると、黒猫になっていた。長いしっぽがユラユラ揺れる。

「……………可愛い……………」

思わず呟くと、金色の瞳がこちらを向く。

ソファーに座り毛を撫でると喉をゴロゴロさせた。

「本当に猫みたい。  
どういう仕組み？」

猫が私の膝に乗ってきた。  
するとゴロゴロしながら丸くなる。

コイツ本当にニッケ？  
可愛いんですけど、本当に。

そう思いながら、猫の頭を撫でていると、私もだんだん眠くなってきた。

談話室の程よい室温と、身体の疲れが眠りを促す。

今日は何だが色々あったけど、皆無事だったし、よしとしよう。

お墓と夢の事は明日考える事にして、それまではゆっくり眠ろう。  
目を閉じると、まだ起きているジャンナ達の、もうすっかり聞き慣れた声が聞こえる。

(平和だなあ……)

こういう平和が続けば何の問題もない。

とりあえず今は眠ろう。

この膝の温もりと一緒に。

## 第十六話：パンドラ夏のお祭り

「こんばんはニック。」

「ニックごきげんよう。」

「ニック」

夕食をとるため講堂へ向かうが、その途中で、女の子からの黄色い挨拶をオール無視しているニックを見かけた。

私も話し掛けてみよう！

「こんばんはニック」

おー、我ながらキモい。

「……お前は一体何してんだ。」

「あれ？無視しないんですか？」「……はあ。」

どうやら目的地は一緒らしい。

ニックの歩幅に合わせてちょこちょこ歩く。

私達を通った後の蝋燭の火が揺れる。

「それで、あれから何かわかったのか？」

私達がワープリングで談話室に戻ってから、何度か地下に足を運んだ。

ジャックがちよくちよく夢に出てきては、私に語りかけるのだ。そこで見つけたのは、同じ地下道で繋がる三人のお墓だった。全部で、アレクサンダー、キャロウ、ベルナツプ、エッジワース、四人の墓だった。

「五人目だけが見つからない。

それに、私達の後から来た謎の人も……………」

もしラロの言うパンドラ怪談が当たっていれば、

「本当にもう一人居るのか？」

「居ます。」

この微かな自信は、ジャックの夢からくるもの。

ニックが振り替わり、金色の瞳が僅かに動く。

そうこうしている内に講堂に着いた。

「淋漓！」

ジャンナの席の周りにはラロとキリルがいた。

私はニックと顔を合わせ、ジャンナ達の方へ歩きだす。

なんだかんだ言ったって、行く場所は一緒だ。

夕食の時間を利用して、校長が全生徒を講堂へ呼んだ。

「集まったの。」

今日のは、重大発表が有るのじゃ。」

私はチョコレートジュースをズルズルと啜る。

ズルズルズルズルズルズル

「甘過ぎてまずい……………」

んーっと唸っていると、

ズルズルズルズルズルズル  
と前から聞こえる。

うるさいな、と思ひ音の根源に目をやると、前に座るニックが凄  
勢いでチョコレートジュースを飲んでいる。

何だが恐ろしい光景だった。

「もう、暑い時期が始まったの。夏は空が晴れ、星空がとても綺麗  
な季節じゃの！」

そこで、毎年好例、パンドラ魔法学校<sup>エストレージャ</sup>星願祭じゃ！」

周りが一気に騒めく。

「筋トレ？何だつて？」

「淋漓……………、それボケ？」

何で魔法学校に筋トレが必要なんだと思ったら、隣からラロの声が聞こえた。

「すみませんね。残念ながら外国語は私にとって敵なの。」

そもそも何故この世界で人と言葉が通じるのか私は不思議だ。どうせ魔法だらうけどさ。

前を見るとニックとキリルが揃いも揃って青い顔をしている。

「エストレージャ星願祭はね、夜空に出る星へお願いをするの。星に感謝するお祭りなのよ！」

隣に座っているジャンナがうつとりする。

「素敵よねロマンチックよね……」

只の七夕もどきじゃないか。

おっと、夢が壊れるからこれ以上はダメだ。

「エストレージャ星願祭は一週間後。」

各クラスから代表で選ばれた者は、皆の願いを星の宿りし泉に届けるのじゃ。

一番早く着いたクラスには、素晴らしい賞品を与えよう。

良いかの？質問は……無いの。」

各クラスの代表って誰だろう？

「代表者は多くて三人。

淋漓達の学年、つまり一年生から選出される。

代表者は校長が選抜する。」

前に座るニックがミルフィーユを食べながら説明する。

「スタートは森の入り口。」

四つの入り口を早い者勝ちで一クラスずつ入った後、課せられる試験を突破する。

ちなみに、四つの中で一つだけ、試験が無い道がある。運の良い奴は、試験をせずに楽々と星の宿りし泉に辿り着けるだろう。」

いつの間にかニックの食物が白玉ぜんざいになっている。

「ニック達の学年からは誰が選ばれたんですか？」

ニックとキリルの表情がだんだん暗くなっていく。

「あ、もしかして、二人が？」

心底疲れた表情をする二人を見て、私達三人はケラケラ笑った。

するとジャンナが私に耳打ちをする。

「実はね、兄さんとニックが仲良くなってきたきっかけなのよ！

最初はスッゴク仲が悪かったのに！男って本当よく解んないわ！」

「そうだったんだ。フフフ。面白い。」

今はいつも一緒にいるのに、最初は仲が悪かったなんて以外。

「ま、主に一年生の為の祭りさ。楽しむといい。」

「へえ。」

まあ私にはあまり関係無いし、普通に星にお祈りするとしよう。

「代表者の発表は星願祭前日<sup>エストレージャ</sup>じゃ。」

本人の前に急に現れるのでな、少々用心した方がいいの。」

急に現れる？

「おっと、忘れるところじゃった。<sup>エストレージャ</sup>星願祭当日には、ダンスパーティーもあるからの。早いうちにペアを決めておくんじゃぞ。へっへっへっ」

校長のその言葉に周りが一斉にざわざわし始める。

「ダンスパーティーって、私ステップとか踏めないしな……」

「私も淋瀝。」

「俺も。」

「淋瀝、そのフルーツサンドとって。」

情けない会話をしていた私の目の前に、フルーツサンドのお皿が置いてある。

そのフルーツサンドを見つめるニックの声に、私は呆れた。

「さっきから甘い物食べ過ぎです。死にますよ。」

どうやらニックは極度の甘党らしい。

何であんなに細いんだろっ？

「いいから……」

「ダメです!」

魔法で皿ごと持っていていこうとするニツクに、それを魔法で阻止する私。

「もうダメだったってでしょ！往生際が悪いなあ！

こんな物ばかり食べてると、いつか水晶玉に映ったニツクみたくなっちゃいますよー！」

早口で言った後、私はフルーツサンドをパクつと口に入れた。

.....甘っ！..!

## 第十七話：驚愕の代表者選び

星願祭前日。

「わっ！！」

いきなり地面から飛び出してきた幽霊にビビり、

「ぎゃっ！！」

「っ！！」

廊下でニツクと鉢合わせ、幽霊扱いしたから頭を軽く叩かれ、

「ひいやっ！って、もうさっきから何なのよ!？」

「…っ、ごめんなさい。」

図書館の本棚の本の隙間から、いきなり顔が覗く。

さっきからビビってばかりの私が怒鳴ると、向こう側の少年がびっくりしたように謝る。

「あ、君、アレクサンダーの計算がとても早い……」

「淋漓です。」

「僕の名前はフィリップ。ベルナップクラスで同じ一年だよ。」

本棚から離れ、二人並んで図書館を出る。  
メガネを着けた頭の良さそうな顔。  
ふわふわの金髪が歩く度に揺れる。

「淋漓は小さい頃から計算が好きだったの？」

「え？うん、まあそれなりに。」

そうか、ってふんわり笑うフィリップ。

何だかどっかの国の王子様みたいだ。

「じゃあ私、こっちだから。」

ろくに大した会話をせずに進んで来ると十字路に来た。  
アレクサンダー寮へ向かおうとした時、手を捕まれる。

「な、何？」

「あ、いや、ごめんね。」

あのさ、もし良かったら……

ダンスパーティーのお相手を願えますか？」

ふんわりと笑っているようだが、目が本気だ。

他の生徒の通る中、わざわざ立ち膝でフィリップは言った。

談話室に入るとジャンナとラロがソファで寝っ転がっていた。

「おかえり淋瀝。」

「お目当ての本はあった？」

「いや、途中で色々珍事件に遭遇しましてね。」

私はソファに座り背伸びする。フィリップの申し出はやっぱり断つておいた。

会ったばかりだったし。

でも何で会ったばかりの私なんかを誘ったのかな？

「そういや、明日だよな！。星願祭。」  
エストレージャ

「代表者、誰になったのかしら？」

「案外俺等だったりして。」

「そりゃあ無いっしょ。」

ヒュー、パンツ！！

「わああ！！！」

「きゃっ！！」

「何だ！？」

いきなり談話室に花火が打ち上がる。

今日は驚いてばかり。

「は、花火？部屋で？ひ、火の用心！！」

「つつこむとこ違うだろ！」

「待って、誰がいるわ！」

パンパンッと尚鳴り続ける花火の中から、ポンッと英雄の様な格好した幽霊が出てきた。

「やあ、勇敢なるアレクサンダークラスの諸君。

君達の名は、淋漓君、ジャンナ君、ラロ君でいいのかな？」

ひょうきんな表情と声に、私達はコクコクと頷く事しか出来ない。  
口角を存分に上げ、胸を張る英雄型幽霊。

「勇敢な君達は、選ばれたのだよ！

明日の星願祭エストレージャの代表者にね！」

なにーーーーーっ?!?!?

## 第十七話：驚愕の代表者選び（後書き）

こんにちは、毎回読んで頂きありがとうございます！

つい先日携帯を水没死させてしまい、パンドラのデータが全て吹っ飛びました。泣きたいです。

けれど読んでくれる方々や、楽しみになさってくれる方々の為に頑張ろうと思います！

## 第十八話：夏の夜の回想

エストレージャ  
星願祭当日、私とジャンナとラロは、途方に暮れていた。

学校の北側に広がる森。

四つの入り口からスタートし、幾つかの試験を突破し、森の奥に星の宿りし泉に皆の願いを集めた箱を沈める。

途中、試験を突破出来なかった場合、脱落。

これが試験内容。

「七夕にする事じゃないぞ。」

もう既に日は暮れ、今、私達は森の目の前に居る。

他のクラスの代表者を見ると、キャロウからは三人、ベルナップからは二人、しかも一人はフィリップだ、エッジワースからは一人。

「って、ジャンヌ!!」

「あんれ、淋漓さんにジャンナさん。元気だつべか？」

燃えるような赤い髪とオレンジのジト目。

「ええ元気よ。」

ジャンヌ、貴方一人？」

んだ。と、答えるジャンヌに不安の色の欠片も無い。

「んまあ、適当にやってみんべよ。お互い頑張るべ。」

クラスの皆の願い事は、小さなダイヤモンドの様な石になり集まった。

それを木の箱に入れ、ラロの肩掛けカバンに入れ、いざ出発！

時刻は夜の八時、ゴーンゴーン、と時計塔の鐘がなる。スタートの合図だ。

先ずは四つの入り口を早い者勝ち。

他の代表者達は走るか飛ぶかで一斉に入り口へ向かった。

するとあっという間に、入り口には透明の膜が張り、残る入り口は一つになった。

残り物には福がある、と言う言葉が有りますね。

急がば回れ、と言う言葉が有りますね。

「さあ、行くじつ。」

校内では、カラフルな料理にオーケストラ、ダンスパーティー等が始まっていた。

賑やかな人混みを抜け、北側のバルコニーへ出る。

だがそこには既に先客がいた。

そいつは一度振り返り、俺をその金色の瞳で認めた後、再び試験の行われている森に目をやった。

「ニック、流石だろ？俺の妹。」

先客であるニックの隣に行き、俺も森に目をやる。

「ああ、凄い。」

素っ気ない言葉だが、こいつはよっぽどの事が無い限り嘘は言わない。よって今のは本音になる。

「だろ。俺の自慢の妹だ。」

視線を森から空に移すと、星願祭にふさわしい星空が一面に広がっていた。

今、俺とこいつは仲良くやっているが、昔はこんな仲良くなるとは思ってもみなかった。

正直、今ではニックとは一番信頼出来る仲だし、絆の強さではそんなじよそこらの奴等には負ける気がしない。と、思う。

懐かしいあの日々。

この学校に入学したあの日、偶然隣に座ったニツクに悪い印象しか持てなかった。

目付きは鋭くて怖いし、暗いし、あんまり口きかないし、相部屋になった時は死ぬかと思った。

勉強も魔法も成績は優秀で、顔も綺麗だから女にモテてるが総無視。勿体ない。

だが、決定的ないがみ合いや喧嘩は無く、まるで俺が見えてないように振る舞うニツクと、お互いが遠のいていった。

同じ学校で同じクラスで相部屋でおまけにとってる教科が殆ど一緒なのだ。だが口一つきかない。

そんな妙な関係が続いてた時、エストレージャ星願祭で、アレクサンダークラス代表者になったのが、俺とニツクの二人だった。

初めこそ嫌だったが、試験を突破していく内に少しずつだが、ニツクの人柄が分かってきた様な気がした。

星の宿りし泉に一着で着いた時、ニツクは初めて俺の前で嬉しそうに笑った。

そんな懐かしい思い出から、ニツクの言葉が俺を現実引き戻す。

「懐かしいな。」

一年の時の星願祭。エストレージャ

「何だ、今俺もその事考えてたんだ。」

二人で森を見つめ、今どこら辺にいるのだろうと想像する。  
ふと、ニツクの横顔を盗み見る。男の俺でも認める端整な顔立ちが  
森を見渡す。

「なあ、ニツク」

「何？」

俺は最近思う事が一つ。

こいつ最近よく笑う。

まさか……………

「…お前さ、実は結城ちゃんの事好きだろ。」

「……………は？」

何言ってるんだコイツみたいな顔してこっちを見るニツク。  
なるほど気づいてないのか。

「まあ俺は、応援するさ。だがなニツクよく聞け？」

お前みたいな万年無表情にジャンナは渡さないよ？分かる？誰があ  
んな可愛い妹を渡すか。

お前なんかえりまきトカゲで充分だ。」

キツと睨み付けられると同時に鳩尾みぞおちに衝撃。

そして冷めた眼で俺を一瞥し、すたすた歩いて中に入ってしまう。  
どうせ甘いものでも食いに行くんだろう。

早くも痛みから復活した俺は、追い掛けて行って、奴の肩に腕をか

ける。

「ダンスのお相手はいかがですか？」

「残念ながら俺はそういう趣味じゃない。」

「奇遇だな。俺も同感だ。」

「何なんだお前。」

他愛のない会話をしながら、俺等は講堂に入った。

## 第十八話：夏の夜の回想（後書き）

どうもこんにちは。

毎度毎度読んで下さって感謝の気持ちで一杯です。

はい、今回はニックとキリルの回想シーンを取り入れて見ました。  
二人は切っても切れない縁でいてほしい。もちろん淋璃ちゃん達も  
ね。

## 第十九話：珍妙な同行者

残り物に福は無い。

私達を選んだ道は試験だらけだった。

暗く不気味、鬱蒼とした森を杖先に光る灯りを頼りに進むと、ガサ、と何かが動いた。

ラロが素早く反応し、杖を音のした方に向ける。

「出てこい！」

カタカタ、

「え……」

「何かしら、アレ。」

「普通に見て…ガイコツだな。」

森の茂みから出てきたのは、骨だった。

カタカタと音を発しながら、見事に全パーツ揃ったガイコツが私達の前でお辞儀をした。

「ヒツヒツヒツ。」

我が輩の名はガイコツ伯爵。

これから我が輩が試験を行う。

ヒツヒツヒツ。」

ガイコツ伯爵とか訳わからん事ホザきだした骨が飄々と歯を力チ力チ鳴らしながら喋る。

「早速だけど、試験って一体どんな内容？」

「む？そんな面倒臭い説明してられるか。」

さっさと試験を始めるとする。」

一体何なんだろうこの骨は。

ザツと、いきなり周りの木や草に炎が燃え上がった。

「あっつー！」

「ヒツヒツヒツ。」

さて君達にこの炎の熱さに耐え、我が輩を倒す事が出来るかね？

ヒツヒツヒツ。」

カタカタと笑う骨と私達の周りは火で囲まれていて、動くようにも動けない。

炎のパチパチという音と、だんだん広がっていく炎の熱さに、じわじわ汗がにじむ。

「ラロ、熱には強いんじゃないの？」

「熱に熱で対抗してどうすんだ。……あちーな。」

この炎にどんな魔力が有るのかは解らないが、異様に熱い。

頭までぼーっとしてくるし、体も思うように動かない。

目の前でヒツヒツヒツ笑ってる骨を睨み杖を振る。

バーンアウト  
「消火！」

「ヒツヒツヒツそんな魔法じゃこの炎は消せんよ！ほれっ！」

少しは弱まった炎が再び骨の所為で大きく揺れる。

熱い……。

どうやら思考までも鈍らせる魔法がかけられているらしい。  
だんだん意識や視界がぼやけてくる。

あの骨、一発蹴りいれて色々と再起不能にしてやろうか。

「お言葉ですけど伯爵。」

それまで黙っていたジャンナが突然口を開いた。  
手には何処から取り出したのかステッキを持っている。

「これは立派な環境破壊よ！」

骨しか残ってない程歳とっている筈なのに、そんな事も解らないな  
んて……」

「なぬ。」

我が輩は年寄りでもないし、環境破壊なんぞしては

「世も末ね！！」

カンッとステッキで地面を叩くと水色の魔方陣が出現した。

「水よ、さあ火を消すのよ！」  
「なぬ！？」

ジャンナの命令と共に、魔方阵から水が噴き出した。骨の間抜けな声と共に、炎はどんどん消されていく。

魔方阵から溢れる水は、私達にもかかりびしょ濡れになる。

冷水を頭から被り、色々とシャキツとしたところで…。

「さあ骨。覚悟しろ。」

「木っ端微塵に粉碎しちゃる。」

私とラロは指をポキポキ鳴らしながら、すっかり涼しくなった体を存分に動かす。

「や、やめい！」

こら叩くでないやめんか！

痛い痛い。あ、肋骨が！これ、ああ！蹴るな！上腕骨が！ああー！  
「ー！！！」

「環境破壊もいいとこだわ。」

「そうよ森林伐採よ。」

「おい骨やらかしちまったな。」

ま、自業自得だ。」

ざまあみる。

三人揃ってチエシヤ猫の様に笑う姿を見て、ガイコツがため息をつく。

「全く失敬な奴等だ。

我が輩は自然界をも司るガイコツ伯爵だぞ。」

その後、私達はこのガイコツをバラバラにしてみたが、結局五分位で元に戻ってしまった。

次の試験へ行こうと、再び杖にライトをつける。

カサ、カサ、と私達の足音。

カタ、カタ、と……………

「……………何で着いてきてんの？」

気付いてはいたが、あえて言わなかったが、最終的にツツコンだのはラロだった。

「失敬だな。

我が輩は泣く子も黙るガイコツ伯爵だぞ。」

「伯爵って、一体どこの家の方？」

「何をわけのわからん事言っとるのじゃ。

ガイコツ家に決まっとるじゃろ。」

何だか不気味な筈の森が、この骨の所為で、只の黒かびだらけのブロッコリーにしか見えない。

「我が輩の名はガイコツ伯爵、別名魔法界の黒幕じゃ！」

「おい骨それ以上言ってみろ。」

アウストラロピテクスの化石だつって博物館送りにしてやるからな。

「

ぶ、物騒な事言つてない！」

ラロとガイコツの会話を聞きながら、私は隣のジャンナに顔を向ける。

「さっきの魔方陣って何？」

「あ！それはね、このペンタクルステッキって言うんだけどね！」  
よく見ると先端に透明の水晶がついてる。

「自然界の物、水、大地、火、風とかを簡単に起こす事が出来るの。  
自然魔術程の威力は無いけど、便利よね！」

「うん、便利。」

ジャンナっていつも色々な魔法具持ってるよね。」

「ええ、兄さんが持たせてくれるの。」

これはね、私の七つ道具なの！」

ジャンナが肩に掛けていたカバンの中身を見せてくれた。

そこにはさっきのステッキを小さくした物の始め、何に使うのか見  
当もつかない魔法具がごっそり入っていた。

「凄い！」

青ダヌキの四次元ポケットみたいだ！」

「青ダヌキ？」

「うん、そういうアニメが凄い流行ってるんだ。」

可愛いんだよ、青ダヌキ！」

静かな森に、突然爆音が鳴る。

「!?!」

ゴオンと伝わってくるのは足下からの振動。

「何かしら？」

「結構遠いけどな。」

確かに音からして近くではない。

「ふむ…。」

これは他のチームの可能性が高いの。」

「骨、何でお前が語ってんだ。」

他のチームは今どこら辺に居るのだろうか？

「ま、一位なんぞ最初から狙って無いけどね。」

「さ、急ぐのじゃ。」

モタモタしとると一位を取り損なうぞ！」

ホント、何様なんだろう、この骨。

## 第二十話：時間魔法を破れ！

それからの試練はトントン拍子に進んだ。

「とっっ！！」

私が起こした風にのり、ジャンナの魔法が飛び散る。

「やった！」

「二番目の試験、合格だ！」

「おりゃ！！」

ラロの手に燃える真っ赤な炎が、試験目がけて飛んでゆく。

「三番目の試験合格じゃ！」

炎によって森の妖精とか名乗る奴がバサツと倒れる。

「試験つて一体何回あるんだ？」

額の汗を拭ったラロは、酷く眠たそうな顔をしている。

今までクリアした試験は、ガイコツ伯爵、北風様と太陽殿、森の妖精、とどれもネーミングセンスを疑う物だ。

「もう大分歩いているけれど、この森、凄く広いのね。」

「実際の距離はこんなに広く無いのじゃ。」

この試験の為に、校長が我が輩達の歩幅は著しく妨害しているのじや！」

魔法でな！といとも簡単に説明する骨に、私は思い付く。

「じゃあ、この道は変わってなくて、私達の歩くスピードが遅くなってるって事？」

「まあそんなところじゃな。」

私は立ち止まり、持ってきたカバンの中から魔法で縮小された魔法理論の教科書を取り出した。

「淋漓？」

「ジャンナ、魔法理論には時間に関する魔法への防御法があったよね？」

ポンッと教科書が大きくなり、私はページを捲った。

「ええ。有るわよ。」

数式で時間魔法を書き替えて、時間をコントロールが出来るわ。でも、とても難しい数式よ？」

ジャンナの説明が終わると同時に、目的のページについて。

教科書の一ページに広がる数式。

「でもこれを解けば、時間魔法も解ける。」

つまり、歩くスピードが元に戻る。」

ペンと紙を取り出し猛スピードで数式を解いていく。

「ふむ……」。

彼女は数学が得意なのかね？」

「ああ。凄い。」

「でもこの数式は五年生で習う位高度よ。」

もし失敗したら……」

「お前の友達だろ？」

俺らが信じなくて誰が信じるんだよ。」

私の脳中を自由に動き回る数字。回路を伝い数式が流れ込んで行き、全身が数字一色に染まる。

この感覚はいつも変わらない。

ガリガリと素早く動かすペンと平行して、私は脳内の数式の中を泳ぐ。

指先に伝わる神経と脳から伝わる神経が交差する瞬間に解答が見える。

「解けた!!」

杖を向け呪文を唱えると、私の真下に金色のペンタクルが発動した。

「やったわ成功よ!」

ジャンナとつさに飛び付いたのはラロの腕。

二人はぎよっとしあい、目を反らす。

「ほら早くペンタクルの上に乗って!」

ジャンナとラロは気まずそうに視線を交わしながら、いそいそと歩いてくる。

「ふん、若いのう。」

先に来た骨が胡坐をかきながら呟いた。

四人がペンタクルに入った所で丁度ペンタクルが動きだした。

下の文字が円に沿ってぐるぐる回っている。

次第にゆっくりになり止まった後、ペンタクルは静かに消えた。

「これで元に戻ったのかしら?」

私達はとりあえず歩いてみる事にした。

「しかし君の計算力には驚いたよ。」

隣を歩く骨は、その頭蓋骨をこちらに向ける。

不気味極まりないが、若干笑っているように見えた。

「小さな頃から計算は得意だったみたいですから。」

「ヒッヒッヒッ。そうかね。」

その能力は一生の宝じゃな。」

一生の宝……

確かにそうかもしれない。

「そうですね。」

後ろでは何やら二人が痴話喧嘩モドキをしている。

「我が輩は君達を誇りに思う。」「え？」

「流石彼のジャック・アレクサンダー率いるクラスじゃの。」

嬉しそうに喋る骨。

この世界に来る前の私が見たら、大爆笑するに違えない。

それぐらい、可笑しな事で溢れている魔法界。

何だかとっても、

「面白いな。」

一度ハマったら抜け出せない。

そう考え私は笑った。

「むっ！アレじゃ！

星の宿りし泉じゃ！！」

カタカタと音をまくし立てて走りだす骨を、私達は追い掛けた。

「どつやら一位が決まったの。」

校長の声に、講堂にいる生徒が息を飲む。

水晶玉をこねくり回している占星術の先生が、何かに驚いた様な顔をしている。

予言でもしているのだろう。

「優勝は、アレクサンダークラス!!」

校長の叫びと共に騒ぎだす講堂。

つまらなそうにチキンをかじる者や、歌まで歌いだす双子、早速妹の自慢を始める奴に、その隣で満足そうにチョコレートジュースを啜る者。

ダンスパーティーも盛り上がって、いよいよラストダンスに入る。

年に一度の星願祭は、エストレージャ盛大に佳境を迎える。

## 第二十一話：星の宿りし泉

薄暗い森を抜けた所に広がる泉。

泉の真ん中、水の上に生えている大きな樹。

樹には白い光を帯びた実が実っていて、そのまばゆさに目を奪われた。

「綺麗……………」

「此処が星の宿りし泉……………」

「素敵だわ……………」

白く輝く実が、水面に映りゆらゆらと揺れている。

「あの白い実には、星が宿っているのじゃ……………」

私達はキラキラと輝く泉に近寄る。

「どうやら、俺等が一等賞みたいだな……………」

「そう、みたいね……………」

「ラロ、みんなの願いを……………」

おう、と言ってラロは箱を開く。

中にはキラキラ輝く、みんなから集めた願い事が詰まっている。

「これをこの泉に流すのね……………」

私達は箱を傾け中身を泉に流す。

キラキラ光る石が、透き通った水に沈んでいく。

周りの木々が揺れ、私達に風を送ってくれる。

夏なのに冷たいその風は、髪を通り抜け水面を揺らす。

「とつても綺麗だわ……………」

ジャンナの青い瞳に、白く光る実が映る。まるでプラネタリウムみたいだ。

空から降ってきた星屑が、そのまま実になって輝いている様。

想像以上の美しさに、私達は黙って星の宿りし泉を見つめていた。

「この泉には、どんな願いも叶えてくれる力が有るのじゃ。」

「どんな願いも？」

「そうじゃ。」

私は泉の水を掬ってみた。

手にひんやりとした感覚と、只の水の筈なのにキラキラと煌めく水。

それぞれの願いが詰まった願いが、この泉に集まる。

「凄……………」

木々の葉っぱのざわめきと、水のさらさらという音。

何処からか、カエルの声が聞こえた。

そんな静かな空間に、突然、何か近づいて来る様な音がした。

「何かしら？」

「走ってこっちに近づいてる。」  
「でも人間の足音じゃなさそうだぞ。」

ザッザッと草の上を駆ける音。

もの凄いスピードで走っているのは確かだ。

「来るぞ！」

グアアアア！

ラロの声と共に、別の叫びが響く。

空気までもを揺らす大きな声と迫力。

思わず後ろにつんのめり、危うく泉に落ちそうになった。

声の主を見るとそこには、

草に立つたくましい四肢。

真っ直ぐに前を見据える瞳。

勇ましく風に揺られるたて髪。

「あ、あれ……」

「すげえ……」

「……ライオンだわ……」

「こりゃ、たまげたの……」

百獣の王、ライオンが立っていた。

「あんれー、二位だっぺか。」

赤いボサボサの髪、オレンジ色のジト目、まの抜けた訛り、勇ましく張る胸には緑色のペンダント。

大きな雄ライオンから降りてきたのはジャンヌだった。

「ジャンヌ！」

「一位はアレクサンダーだべか。いんや、おんめでとだあ。」

にやり、笑いながら頭をかくジャンヌの腰には、大きな剣がかかっていた。

「ジャンヌ、このライオンは貴方の？」

「そうだべよ。」

おらの相棒、ファウストってんだべ。」

ゆっくりこちらに向かってくるファウスト。

ジャンヌと並んだ時、軽く頭を下げた。

「我の名はファウスト。以後、お見知りおきを。」

低く安定した声。

それは間違いなくライオン、ファウストから発せられた言葉だ。

この世界に来てからというものの、ティーカップが喋るうが、箒が喋るうが、あまり驚かなくなった。

「かつこいい相棒だな。」

ラロがそつと手をファウストのたて髪に乗せる。  
ファウストはおとなしく目を閉じた。

「他の皆遅いべな。」

願いの石を流し終えたジャンヌが周りを見渡す。

「あら？淋漓、ガイコツ伯爵が居ないわ。」

「？本当だ…。」

どっかに消えちゃった。」

周りをぐるりと見渡したけど、骨の姿は見当たらなかった。

そういえば、カタカタという音もいつの間にか聞こえなくなっていた。

「棺桶に帰ったんだろ。」

今度墓参り行ってやるうぜ。」

ラロの言葉に、「棺桶でない、ガイコツ家じゃ！」と、骨の言葉が聞こえた気がした。

「ふああ。眠いわ。」

「だべなー。おらも眠い。」

「帰ってシエスタシエスタ。」

三人共、あくびが横へ横へと移って、しまいには私があくびをした。

他のクラス代表者が着くのを待ってるのは、非常に面倒臭い。  
そう思ってるのは私だけじゃないと思う。

ゲココ、とさっきのカエルが鳴いた。

「カエルも鳴いてる事だし、帰りますか。」

私の言葉に三人は即座に頷いた。

ゲココ

カエルも私の言葉に返事をした様だった。

## 第二十一話・星の宿りし泉（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。

無事に星願祭編が終わりました！次の回からもじゃんじゃん書いていきたいと思えます！

## 第二十二話：朝、アンパンマンと遭遇

夜が明け、学校は休み。

朝日が窓から差し込む講堂で、キムチ丼を乙女らしくかきこんだ。

「男らしいわね、淋漓。」

前に座るジャンナが笑顔で誉めてくれた。

ジャンナの綺麗な髪が日の光で輝く。

「ジャンナ、優勝おめでとう！」

ドツタンバツタンと登場したのは、ジャンナと同色の髪を輝かしながら歩くキリルと、私の食べてるものを青い顔して直視しているニツクだった。

「お前……………何食べてんだ…？」

「激辛キムチ丼。」

「……………。」

信じられない、と言った風に顔をしかめたニツクは、私の隣を陣取り大きなパフエを食べ始めた。

朝っぱらからよくそんなもんが食べられるものである。

「お前に言われたくない。」

「勝手に人の心を覗かないで下さい。」

「そんな事より。」

優勝おめでとう。」

「……………ありがとうございます」

金色の瞳が微かに笑っている。

昨日の星願祭では、一位がアレクサンダー、二位がエツジワース、  
エストレージャ三位はベルナツプ、そして四位がキャロウの結果に終わった。

機転をきかせ時間魔法に対応したアレクサンダーとエツジワースだが、頭はいいはずのベルナツプは律儀に道を歩いて来たらしい。

「試練なしの道を選んだキャロウクラスは……………最下位ですか。」

一体何があったのだ。

「夜道が怖くて歩けなかったらしい。」

「はあ？」

まあ確かに夜の森でいきなり、訳のわからん伯爵だと喋る骨とか出てきたら、色んな意味で怖いさ。

「びつしり五寸釘が刺さった蚩人形がナンパしてきたり、」

「五寸釘が怖すぎてナンパが洒落になってません！」

「変態星人猟奇的連続百人殺し、と叫びながら包丁持った奴等が全速力で追ってきたり、」

「怖いです。怖すぎます。そんなん来たら直ぐにゴールしちゃいます。」

「笑う猫の胴体と首別々で脅かしてきたり、」

「某物語のシマシマ猫ですか。」「歩いていく内に辿り着いた墓場

で、数百体にも及んで血を撒き散らしながら迫ってくるゾンビ。」  
「怖いわ！」

「ってかそれ普通に試験でしょ！」

「普通どころの話じゃ済まされないじゃ！」

何、今の語尾。

「へへへー。君達面白いねえ。」

「漫才コンビか何かあ？」

私達以外の聞き慣れないマヌケな声が聞こえ、私達はピタリと止まる。

「ねえもつと面白い話してよ！」

声の主は私の一メートル程距離を置いた隣に座っていた。

微妙な間である。

コロツコロの体型に天然パーマであろう赤毛。ほつぺたはふつくらしとし、ソバカスがのっけていて、何だかアンパンマン、違う、あんパンみたいだ。

ムシャムシャと次から次へと口に入れてるのはあんパンだ。

「僕アレクサンダー二年、ドン」

ドンって何。効果音？

「僕の名前さ！」

ところで、君、例の数学少女で有名な結城淋漓ちゃんだよねえ？  
校長先生が君につて。」

ドンが渡してくれたのは便箋。  
宛先も送り主も書いていない手紙だった。

「じゃあ渡したからあ。」

そう言つて完食した皿を残しデブデブと歩いていってしまった。

私はキムチ丼でヒリヒリする口の中に、名付けて「凍っちゃってる  
紅茶」を流し込む。

「どれどれ…？」

パラパラと便箋を開け中の紙を取り出すと、紙が手を離れ私の顔真  
正面に来た。

何も書かれていない紙から、校長の顔が浮き出てきた。  
ニツクも紙を覗き込む。

「淋漓じゃの？」

無事手紙が届いて良かったわい。」

喋って動く校長からの手紙。  
いつの間にかジャンナとキリルも私の後ろから手紙を覗き込んでい  
た。

「淋漓、いいかの？良く聞くんじゃ。」

真剣な顔をする校長に私は頷いた。

「最近変な夢を見たかね？」

私とジャンナは目を合わせる。

エストレージャの件があったから、夢やら慕やらは記憶の端に追いやっていた。

「ジャックの言う通りにするんじゃない。いいかね？」

もう既に闇が動き出している。

用心するのじゃぞ。」

闇？何だそれ？

嫌な響きを纏うその言葉に、心拍数が高まる。

紙に目を向けると、校長の顔が消えかけていた。

「あ！待った！」

「おっとそうじゃ！大事な事を忘れておった。

淋漓、エストレージャの景品は今しばらく待つんじゃない。よいな？」

おう、そうかまかしとけ！

つていやいやいや。

まだ聞きたい事が山ほどある！

そう思い畳み掛けた紙を掴むが、時既に遅し。

私の手に乗った校長からの手紙は、ただの紙つぺらと化した。

何故この世界は、そういう話をいつも出し惜しみするのだろう。

中途半端に聞かされても、

「わからーん!!」

「およ?今日の朝食はクロワッサンか」

私の叫びを華麗に無視して入ってきたのはラロだった。

ドスンと私の隣に座り、何がそんなに楽しいのか私の顔を見てニカツと笑った。

「淋漓、もうすぐ夏期休暇だぞ!」

そうか。

魔法学校と言えど、夏期休暇と冬期休暇はしっかりあるらしい。休暇中、家に戻る生徒も居れば、学校に残り友人と過ごす生徒も居る。

といっても私は、家に帰りたくても帰り方を知らない。

その上、さっきの様な校長の妙な話を聞かされたのである。帰って一人で過ごすより、魔法が存在する世界にいた方が身のためかもしれない。

「淋漓とジャンナさ、俺の家に遊びにこいよ!」

ラロが嬉々として喋る。

「父さんが友達連れて来いってさ!」

そうか、ラロは家に帰る方法があるんだ。

「ジャンナ、夏期休暇に予定はあるの？」

「少年、それは駄目だ。可愛い妹を一人男の家になど。」

私が隣のジャンナに問うのに対し、ビシッと指をラロに向けキリルは睨む。

「一度家に帰るけれど、特にこれと言った予定は無いわ。」

皆、家に帰れて羨ましい。

「じゃあ行かない？ラロの家。」「淋漓が行くのなら私も行くわ！」

「よし決まり！」

最後のラロでこの話は決まった。

後ろでキリルがなにやら騒いでいたが、誰も聞きゃいなかった。

第二十二話：朝、アンパンマンと遭遇（後書き）

こんにちは。

更新大分遅れてすみません…。

次の展開にどう持っていこうか試行錯誤している内にどんどん日数が！

これからも更新に時間がかかってしまう事があると思いますが、気長に付き合ってくれと、私泣いて喜びます。

## 番外編：魔法界と現実世界

「えー、皆さん、私達の魔法界での活躍を描くこのへっばこ小説を  
読んでいただきありがとうございます！感謝感謝。

てなわけで、今回の番組は？」

「魔法界と外野について。」

「外野って……」

ニック曰く外野とは私達がもと居た現実世界の事なんです。  
ちなみに私は日本出身。ニックは？」

「イギリス……」

「あ、あの、もうちょっとテンションを……上げて……」

### 魔法界と現実界の関係

所謂パラレルワールド。

お互いの世界が平行に存在し、現実界の人々は魔法界の存在に気づ  
いていない。

魔法界へ一度入ると、魔法界で生活が出来るようになる。

勿論二つの世界での生活も出来るが、ほとんどが魔法界に引越  
してくる。

理由は便利だから。

基本、現実界で魔法は使わない。使う必要もないし、変な呪文呟い  
たりなんかしたあかつきには、かなり、イタい。

今のところ両世界に支障はなく、二つとも平和な暮らしを続けている。

## 魔法界

魔力が存在する世界。

現実界と違い、科学で出来ている物は滅多に存在しない。

ほとんどが魔法で動き世界が回っている。

電車や車の様な物はあるが、それは形だけで事実、魔力で動いている。

しかし、移動手段はみんな歩きか箒等。

他にも魔力の宿る代物がドッサリとある。

街並みは洋風で、時折通行人と一緒に魔法瓶が浮き、箒が歩いている。

いくつかの地区に別れており、現実界同様、魔法界の中心で組織が動いている。

基本の組織は、魔法界中央機関。

その中に保安庁や衛生管理省等の多くの部類で分けられている。

魔法界は基本、全地域治安はいい。

大きな犯罪や事件が起こることは滅多にないので、正直現実世界と

は比べ物にならない、いや比べるのも失礼な位、住み心地がいい。

「一体何なんですか、この文章。失礼の使い方分からないのかな、そりゃ残念。是非教えたい。」

「誰に喋ってるの。」

「次は現実世界の説明です。」

## 現実世界

魔法の存在が無く、代わりに科学の発展した世界。

科学進歩が進み、人間の能力や開発が発達。

魔法はないが、超能力たる如何わしいシロモノを生まれつき持っている人間が極稀にいる。

公にされていない、というか公にしたとしても大変な事になるので、そこは大人の事情。

近代化した都市と反対に、自然豊かな田舎も存在。

「私が住んでたのは都会の田舎でした。」

「へえ、超能力なんて、実在するんだな。」

「魔法を平気で使ってる人から言われてもいまいちですね。」

「超能力は生まれつき備わってる人しか使えないのか。」

「みたいです。……あ、…」

「…ん？どうした？」

「あ、いえ。」

ちよつと中学の同級生にそれらしき子が居たのを思い出して。

「レアじゃないか。」

「んー確かに変わった子だったけど、只の噂だと思います。」

「ま、お前の過去の話に読者の時間を省かせるのは」

「あーはいはいはい、そりゃどうもお気遣いありがとうございます。」

「さて皆様、見苦しい私達の会話をさらしてしまいすみません。」

「おい」

「さて次話からは、本編です！」

「これからもよろしくお願いします。」

**番外編：魔法界と現実世界（後書き）**

こんにちは。

今回は番外編にさせていただきました。

設定はこの先増える予定です。

それと、新連載を考えています。良かったらそちらも宜しくです。  
次話からは夏休み編です！

## 第二十三話：時計塔ティータイム

早速夏期休暇に入り、閑散とした学校内で私は暇をもて余していた。

ぶらぶらと無駄に長く広い廊下を歩く。

今のところ闇は直接私に絡んではこないようだ。

最近の悪夢と言えば、この間の総テストだ。

休暇直前にあつた魔法のペーパー&実技試験（学校用語でシステムテストと言つらしい）はとっても難しかった。

けれど魔法が得意なジャンナの協力もあつて無事、ラロを含め私たちは三人で良い点をとることが出来た。

そんな事を考えつつ歩いていると、杖を持ち魔法で大荷物を運んでるニックがひょっこり現れた。

「あ！ニック！」

知り合いの居ない学校内で知人に会えたことで、私はご機嫌になった。

つい、にっこり笑って名前を呼んだら、ニックはキョトンとした様子から直ぐに目を逸らされた。

「何してるんですか？」

とことこ近寄って訊ねると、ニックは顔を上げた。  
若干、顔が赤い。

「薬草と魔法薬を運んでるんだ。」

ニックの周りでは、瓶が連なって宙に浮き、薬草が束になってぶら下がり……

何だか緑黄色野菜みたいだ。ニック自体が。

「手伝いましょうか？」

「いや、コレくらいなら平気。」

素っ気なく言うが、彼なりに私を気遣ってくれているのが解る。

今日はどうせ暇だし、せつかくニックもいる。

私は長い足を駆使し前を歩くニックの後を追いかけた。

「……………何故付いて来るんだ？」

「だって暇なんですもん。」

間髪入れずに答えた私に、ニックはため息をついた。

一通りニックを追いかけ回して、私が喉が渴いたと連呼しているよ、ニックが時計塔の中に入っていた。

キョトンとしている私を振り返りニックが笑う。

「喉渴いたんだろ？美味しい紅茶があるんだ。」

こんな所に？

ニックは時計塔の扉を閉め、階段を上り始めた。

時計塔の中は細長い筒状になっており、壁に沿って螺旋階段が連なっている。

所々壁に埋め込まれているステンドグラスが、外の強い日光に当てられ綺麗に光る。

こんなステンドグラス、外からじゃ気が付かなかった…。

上まで上りつめるとそこには、時計の歯車がかたかたと音を立てていた。

その下を潜ると、外に通じていた。

スルツと下に滑り込み、外に出ると学校敷地内全域が見渡せた。私は目を見開き身を乗り出した。

「わあ……………、綺麗…」

思わず感嘆。

一面に広がる深緑と湖。

強い風が私をぶわりと包み、私はそれをグッと肺に吸い込んだ。

まるで映画のワンシーンの様なそれを見ていると、いつの間にかアイーカップを持っていたニックが隣に来ていた。

感動から一転。

「どこで、いつの間に、どのような経緯で、作ったのこの紅茶。」

立派な塔だが、よく見ると塵や埃が凄い。

細かい所まで掃除が行き届いていないのは確かだ。

つまり、汚い。

その後も私がペラペラ喋っていると、ニックがカップに口をつけながら遠くを見た。

聞いちゃいない。

まあいつもの事だけど。

「学校どう？」

「え？」

ニックがこちらを見ずに私に問う。

「楽しいか？」

「はい。」

「こつゆう生活もアリです。」

「そうか。」

あ…笑った。

レアなニックの笑った横顔。

普段とのギャップに思わずドキリとする。

一瞬、ニツクにこの間校長から聞いた事を相談しようか迷った。  
あの場にニツクも居たから、相談と言っても今後の事についてなん  
だけど…。

でも……。

私っていつも人を頼ってばかり…。  
時には私自身で解決きや。

そう思い直し、私は話題を変えた。

「え、えと…、あつ、ニツクって何処に住んでるんですか？」

「あつち。」

随分具体的だが。

ニツクの指は本校舎の裏辺りを指した。

広く広がる風景。

ここは紛れもない魔法界だ。

モスグリーン色の木々や、薄水色の空。

優雅に飛んでいる鳥。

やっとの感じで一学期が終わり、今こうして魔法界の風景を見てい  
ると心が和む。

しいん、と静まる空気に、聞こえるのは葉が擦れる音くらい。

物思いに耽り、やっとの事で校舎裏から少し離れた所にある赤い三  
角屋根を見つけた。

「あそこがニツクの家ですか。親とかはあそこに？」  
「ザアア、と大きな風。  
妙な間があった。」

「いや、俺の親は居ないよ。」  
「……え……？」

声音一つ変えずにニツクはあっさり言った。

それって、家に親が居ないってこと？それとも…

この空気からして、本当に親が居ないらしい。

まずい…

途端に聞いてはいけない事を聞いてしまった罪悪感が私を襲う。

実際、私も小さな頃に両親は亡くした。

私自身、人にはあまり触れて欲しくない問題だった。

「俺は親から望まれずに生まれたんだ。」

きつい言葉だった。

悲しい言葉。

しかしニツクは、真っ直ぐに言い放った。

横顔を盗み見ると、前をしっかりと見据えて凜としている。

強いなあ……

そう思った。

ニツクのあの鋭い目には、強靱な精神力や意志、思いやりだって沢山詰まってる。

最初に会った時も、あの目は凄く印象的だった。

「ま、そんなこと俺は特に気にしてないから。」

黙って聞いていた私にニツクはカラリと笑った。

そんな光景に、私も自然と笑みが溢れる。

心臓辺りに、紅茶ではない暖かいモノが流れ込んでくる様な気がした。

不思議とニツクの側に居る時、安心感で満たされる。

それは多分ニツクが持つ力なのだろう、と勝手に解釈。

「明日、キリルとジャンナが戻って来るって、連絡があつたぞ。」

「本当に!?!」

「ああ。」

「やった!」

にやほりにやほりと笑うと、ニツクが突然頭を撫でてきた。しかも真顔で…

「!?!……………こわい……」

私の非難の声をスルーし、ニツクは口を開く。

「お前、猫みたいだな。」

耳としっぽが見えるとでも言いたげな顔。

あなたがそれを言いますか。

今度は私がそれをスルーした。

「あっ！あの、折り入って相談があるんですけど。」

「…何だ？」

何か察したのか、少しニツクの顔が面倒そう。

「宿題を教えてください！」

「……………」

ゴーンゴーン、と時計塔が三時だと知らせてくれた。

私は紅茶の最後の一口を飲み、もう時計塔の中に入っていったニツクについていく。

ニツクの淹れてくれた紅茶は、とっても美味しかった。

## 第二十四話：お泊まり会へ出発！

私とジャンナとラロは整列した。

「俺の家にはこの鍵で通じてる。」

その一言と共にラロはその銀色の鍵を、部屋にある中くらいの扉に挿した。

何でも、魔法で出来た扉に自分の家の鍵を挿すと、自分の家に行くらしい。

その名も、どこだってドア。

ラロは学校のあるミストダイヤ地区から大分離れたオリエンタ地区という所に住んでいるらしい。

そんなところに鍵一個で行けるとは、流石魔法界。

扉を開けるとそこはラロの家に繋がっていた。

暖かみのある木で出来た壁や床、広々とした部屋にいくつか魔法がかかった小物が置いてある。

「素敵な家。」

壁に一枚、家族で撮った写真が飾ってあった。その写真を見てジャンナがふんわりと笑う。

「これ、いい写真ね。」

「へへ、前に行ったキャンペーン時撮ったんだ！」

一方、その頃…

「おい、いいのかキリル、これは明らかな不法侵入だ。」

「構わん、続けるぞ。」

コイツはバカだと思い、ニツクは事の発端を思い起こす。

一度キリルとジャンナは実家に帰ったが、その間ニツクはキリルから頼まれていた薬の調査をしていた。

途中、やれ紅茶だの宿題だの思いもよらぬ珍事件が勃発したが。

ニツクの家は学園とほぼ一体化した所にある。

丁度そこで薬が完成した時、キリルが帰ってきて早々ほざいた。

「よし！この薬を使って、ジャンナ達を追いかけるぞ！」

軽く犯罪の臭いがし、キツパリ断るも半分引きずられながらニツクは任務を遂行する事になった。

青い魔法瓶に入った薬。

ニツクが作っていたのはなんと、体が消えてしまっただった。

「おー、ちびちゃんたち来たかー！」

カハハ八とでつけえ声で笑うのは、ラロの父親。

「初めまして、こんにちは、お邪魔します。」

寸分の狂い無くハモる私とジャンナを見て、やはりカハカ八とでっかな声で笑った。

「母さん今ね、仕事で魔法界中央機関に居っから、多分今週は会えないかな？」

「お母さん、エリートさんだね。」

魔法界中央機関は、ここオリエンタ地区にはオリエンタ支部、本部があるのは学校があるミストダイヤ。

「へえ、ラロのお母様はそこに勤めてるのね？」

「うん、その保安庁に。」

ラロパパが冷蔵庫の扉から顔を出す。

「さ、ちび達夕飯作るぞ！」

そう言ったラロパパの右手に、その体に劣らない大きな肉の塊。後ろのテーブルには、野菜や果物がどっさり転がっている。

「凄い量ですね。」

食べきれるんですか？」

「おう嬢ちゃん、何だか客がまだ居るみたいだからな！」

沢山作って越したこたあねえ！」

ラロパパが部屋の端に視線を送った後ニヤリと笑った。

「よし！ちびっこ共、庭からスパイスをとってくるんだ！」

きちんと整理されている部屋を一旦出て、淋漓達を追っかけていたら、カツハハハと笑い声が聞こえた。

そつとドアから中を覗くと、四人で楽しそうに談笑している。

「くそ、ジャンナが笑ってる。可愛い…。」

隣で馬鹿が何か喋っているが馬耳東風。

ラロの父親がニヤリと笑い、他にも客が居るようだ、と言った時ヒヤリとした。

今俺たちは完全に透明になってる筈だ…。

……ばれてない筈…。

そう考えながら、心なしか忍び足でスパイスをとりに行く淋漓達を追った。

何だかストーリーカーみたいだ…。

我ながら気持ちが悪い。

「ラロ、他にも客って、他に誰か呼んでるの？」

綺麗に整えられている庭の草や木の実ををむしりとりながら淋漓がラロに言った。

「いや、俺が呼んでるのは淋漓とジャンナだけだよ。

誰だ？他って？父さん遂にボケたかな？」

心ですみませんと一つ謝っておく。

「とれたわ。

家に帰りましょ。」

カゴに入れたスパイスを持って、三人はくしゃみを連発しながら家に入っていった。

ラロパパが作った料理は豪快に盛り付けされており、どれもとても

美味しそうだ。

いただきます、と手を合わせ私はパンをかじった。  
ネズミみたいだ、と思うと、壁に一枚の紙が貼ってあるのに気付いた。

家の形を型どった枠の中にネズミが描いてある。

不思議な事に、四匹のネズミはテーブルでご飯を食べているのだが、二匹、後ろで突っ立って食事中のネズミを眺めているネズミがいる。

変な絵…。

またまた不思議な事にその絵は動くのだ。

美味しそうに食事をするネズミ。それをただ眺めている二匹のネズミ。

本当に変な絵…。

「おっ？ 淋漓ちゃん、あの絵気になる？」

「え？ あ、はい。」

変な絵ですね。後ろの二匹も食事に入れてあげればいいのに…」

私がそう言うと、ラロパパは私の更に奥、壁に向かって言い放つ。

「だよ。お二人さん。」

誰だか知らねえが、んなチンケな透明薬なんか使ってねえでさっさと出てこい。」

「え？」

「は？」

「…どういう事ですか？」

食べ物を口に入れたまま固まる私とラロに反して、礼儀正しいジャンナが何にも居ない空中に視線を這わす。

「形示せ、型どり型どり、薬よ抜ける。」

ラロパパの口から流暢に呪文が唱えられ、何にも居ない場所から二人の人影が……

つて、

あれ？

まだ向こう側が透けて見える程度だが、その人影には見覚えがあった。

艶々の黒髪に仏頂面…

銀かかった金色の髪に青色の瞳…

つて、

「は？」

「何でここに居るんですか？」

「兄さん!？」

「不法侵入……」

私らはただただ呆然と、紛れもない真正正銘の、訳は解らないけど五千歩くらい譲りに譲って仮に何かしらの用事でこのような常識は

ずれ及び犯罪に関わらざるを得ない、いや確実に関わっているこの二人を見上げた。

第二十四話：お泊まり会へ出発！（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます！

更新大分遅れてすみませんでした。

色々模索していたら…、時が経つのは早いですね。

これからも登場人物が色々やらかしてくれるので、宜しくお願いします！

## 第二十五話：不法侵入は犯罪です。

所変わってラロの部屋。

「もっつ！兄さん！私は心配しなくても平気って言ったでしょ！？」

怒った顔も可愛いジャンナにキリルはごめんごめんと言いながらも顔をほこばらせている。

「一緒に来たかったんなら、そう言えばよかったのに。」

ジャンナとキリルを見て咳いた私に、隣のニックがふつと顔を和らげた。

「あいつにとってジャンナは大切な存在なんだ。」

「？」

「ジャンナが楽しみにしている事に、下手に首突っ込めないだろ。」

視線をニックから二人に向ける。

普段は鬱陶しくさえ感じるキリルだが、見ているとやっぱり兄弟なんだなと感じた。

ちよつとした仕草や表情が似ている。

「よし！今夜は遊ぶぞーっ！」

にひひーと、楽しそうなラロの手には無数の魔法で出来たらしい遊

び道具。

一口かじる毎に服が変わる棒キャンディ、誰でも歌が上手になる薬、実際に動いてくれるチェスの駒。何でもこのチェス駒、ゲーム中相手の駒と口喧嘩をおっ始めるらしい。

「んだからさ、うるさいのなんのって。」

と、言いながらも嬉しそうなラロ。

ともかく次から次へと色々なおもちゃが出てくるので、全然退屈しなかった。

既に日付が変わり、月が空高く上がっているにも関わらず、私達は部屋の真ん中に皆で固まり、魔法版人生ゲームをしていた。

大袈裟に、天井から落ちてきたサイコロに目をやり、杖の先で駒を動かす……

「五……………」

「淋漓、えー、何々？」

今すぐに薬草酒やくそうしゅスイカラ酒さいけを作れ。」

大体予想はしていたが……

「作れんそんなもん！」

「さもなくば十秒後に貴方に世にも希な幸福が、」

予想以上にメチャクチャだ。

「ってもう十秒経つ……………、？」

ひゃー！ー！ー！ー！ー！

途端に何か上からボトボトと降って来た。ふわふわしててピヨピヨしてて、上から降ってきたかと思うと今度は私の下に潜り込んで持ち上げてくる。もの凄く大量だ。

「ひよこ！？何でひよこ！？」

見てみると大量のひよこが私を包んでいる。

「凄いな、それラッキーチックだ！あまりお目にかかれない魔法界のラッキーアイテムさ！」

キリルの興奮した声が聞こえたと思った瞬間、

「わ、わ、わー！ー！ー！ー！」

完全にひよこ達に包み込まれてしまった。不思議と息苦しくなく、逆に暖かくて柔らかくて心地いい。

「ひ、ひよこさん？あの出して頂きませんか？」

手を有耶無耶に動かすが、出れそうにない。なにか理由があるのだろうか？

「へえ、こいつ運が良いじゃないか。」

ニックが隣のでっかなひよこの塊から、ちっさなひよこを一匹手に乗せた。

「凄いわ兄さん、私、本でしか見たことなかったわ。」

「流石ジャンナの友人！」

「時々出るんだよこの人生ゲーム。大抵は普通の魔法具か黒魔術に使うような下手物なんだけど。」

「たまに大物がね」

とラロの声が最後、何にも聞こえなくなってしまった。

ふわふわと身体を包まれ、視界は明るく聞こえるのはピヨピヨと小さな鳴き声だけだ。

そう感じた瞬間、耳にキイインと耳鳴りを感じ、視界がぐらついた。

しかしそれは直ぐ治まった。

何事だと顔を上げれば、

「やあ！」

「ひいやあああああ！！！」

しばらくご無沙汰だった懐かしい顔が目前にあった。

そこにいるはずのない人物に一瞬怯んだが、ある疑問が私の頭をよぎる。

「久しぶり、元気だったかい？」

赤い髪に緑色の瞳。

「あ、はい元気です。あの…」

前はとても苦しそうな顔をしていたのに、最近は穏やかに笑っている。

「うん？」

最近と言ってもここ一ヶ月は姿を現さなかった。

「失礼を承知で……」

だからだと思っ。

「何だい？」

「名前何でしたっけ？」

ひよこに囲まれながら、一人やさぐれるジャック。  
いつも私の夢に出てくる人だ。

「淋漓、君はひどいね……」

わざと泣き真似を入れてくる所、非常に鬱陶しい。

「すみませんって謝ってるじゃないですか。」

それを聞いて、ジャックはハハハと楽しそうに笑った。

あまりにも楽しそうに笑うので、私もつられて笑ってしまった。

その日、彼は沢山の話をしてくれた。

今までまともな会話をしてこなかったが、ジャックは昔の思い出話や自分の武勇伝を長々と話した。

私にとってジャックから聞くその話はとても面白くそして新鮮だった。

けれど、ジャックとのひよこに囲まれた中での対談は、また別の機会に……

**第二十五話：不法侵入は犯罪です。（後書き）**

お久しぶりです。

更新恐ろしく遅くなりすみません。

受験を控えているからか忙しく、中々更新できませんでした。書く気は満々ですので、これからもよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3590q/>

---

パンドラ魔法学校と黄昏の賢者達

2011年10月12日16時48分発行